

銘々のテーブル

窓ぎわのテーブル

テレンス ラテイガン 作

能美 武功 訳

登場人物

メイベル

グラデイス・マシスン

モード・レイルトンベル

ミーチャム

ドリーン

ファウラー

アン・シャンクランド

パット・クーパー

ジョン・マルコム・ラムズデン

チャールズ・ストラットン

ジーン・タナー

時 冬

第一場 食堂 夕食

第二場 広間 夕食後

第三場 食堂 朝食

第一場

(場) ボーンマス近くにあるボーリガードホテルの食堂。小さく装飾品少なし。実用のみの部屋。後ろの扉は広間に通じ右手のスイングドアは台所に、右手奥の扉は、玄関および他の部屋へ通じる。左手に窓。現在カーテンがしてある。冬の夕方七時頃。客達は食事中である。

客達は一人一人、小さな別々のテーブルに座っている。例外は若い二人、チャールズ・ストラットンとジーン・タナーで、これは他の定住の客とは違い、短期滞在の為、二人一緒にテーブルについている。このテーブルは他のテーブルと異なり飾りがなく、部屋の隅にある。他のテーブルは定住の客の銘々のテーブルのため、薬の壺、お気に入りの漬物入れ、個人的な装飾品が置いてある。若い二人、なかなか魅力的な二人なのに全くお互いを無視し、本を読んでいる。二人の間に花瓶あり。

きわだつた場所にレイルトンベル夫人のテーブル。場所だけでなく、見ただけで他の婦人よりきわだっている。ジーンだけは、スラックスを履いて例外だが、婦人達は皆夕食には何かに着替えて来る。しかしこのレイルトンベル夫人はいつも他の婦人よりは目立つ何かに着替えて来る。他の婦人達(ジーンは例外)は毛皮のストールをつけているが、レイルトンベルは銀狐のストールである。他の婦人達(ジーンは例外)は小さな宝石を身につけているが彼女は他と比べものにならない大きな宝石。

ミス・ミーチャムが彼女の近くに座っている。眼鏡をかけず、非常に目を近付けて競馬情報誌「今日のレース」を読んでいる。レイルトンベル夫人「約六十五歳」と同じ年頃だが

彼女よりずっと派手な衣装である。但しそれによる効果は全くなく、若くは見えない。その傍にマシスン。役人の未亡人。そのため、この中では一番貧しい。年金生活者である。但し、他の二人よりは若い。灰色で、鼠に似た顔。衣装は申し分なし。ファウラーは男。元パブリックスクールの校長。七十歳。静かで感情を表に出さない。離れて座っている。

窓際のテーブルには人がいない。それからもう一つ中央に近いレイルトンベル夫人の近くのテーブルにも人いず。

二人のウエイトレス 一人は中年のメイベル、もう一人は若いドリーン が給仕をする。メイベルは無口で陰気、仕事を任せられる。ドリーンは気まぐれ、おしゃべり、仕事を任せられない。現在、メイベルだけが場にいる。マシスンに料理を持ってくる。()

メイベル メダイロンでしたかしら、それともグーラッシュ。

マシスン (発音を直して。) メダイヨンよ。

メイベル すみません、グーラッシュだと思って。

(持ってきたグーラッシュを持ってキッチンドアの方へ進む。)

マシスン 多分私の間違いね。

メイベル (陰気に) ええ、多分。

(ミーチャムを通り過ぎる時に。)

メイベル ミーチャムさんはグーラッシュでしたわね。

ミーチャム (本に没頭している。) 何ですって。ああ、

そうよ、メイベル。有難う。

メイベル (グーラッシュを置きながら。) デザートは何になさいますか、ムース・アンジェリック? それともター

ンオーバーですか。

ミーチャム あなたのお薦めのものは。

メイベル ターンオーバーをお薦めますわ。

ミーチャム じゃあ、ターンオーバー。

(メイベル退場。)

レイルトンベル コックが最近腕を上げたんじゃないかしら。パイの皮、できがよくなったわ。

ミーチャム そうでもないわ。昨日のお茶の時のタルトはどう。大砲の弾みたいに堅かったわ。

レイルトンベル あら、あれ、お嫌いでしたの。私はおいしく頂いたわ。火曜日のあのピンクのケーキよりはずっとましだった。

ミーチャム ピンクのケーキは私嫌いじゃなかったわね。

あのタルトを食べたあとおながぐるぐる鳴ってしかたがなかった。おかげでひどい夢を見てしまったわ。

レイルトンベル (かすかに微笑む。) あら、夢だったらいつものことじゃないの。

ミーチャム いいえ、この夢はいつもとは違ったの。私、いつもは見たい夢しか見ないもの。この時の夢はひどかったわ。意味のない悪夢。棍棒を持った男に追いかけられたの。

(少し間のあと) 木曜日の夜はちゃんとしていた。ルイ十五世と話をしたの。

レイルトンベル (からかい半分に。) あら、そうお。

ミーチャム このグーラッシュおいしいわ、メダイヨンよ。りよかつたんじゃない?

(本に戻る。しばらく間あり。この間ミーチャム近視の目で、

競馬の本を子細に見る。()

レイルトンベル ミス・ミーチャム、明日の勝ち馬わかりましたか。

ミーチャム これによればマーストンラッドがよさそうね。

一、二ポンド賭ける価値はありそうよ。

レイルトンベル 最近私、競馬はやらないわ。(思い出す

ように、少し間を置いて。)夫が生きていた頃は、あの人、私によく五ポンドも賭けてくれていたわ。

ミーチャム(見上げながら。)父が健在だった頃、私、二十五ポンド単位で賭けたものよ。配当もちゃんと貰ったわ。(競馬の本に戻る。)

レイルトンベル(突然いらいらして)どうして眼鏡をかけるの。

(ミーチャム、本を下げる。)

ミーチャム これで見えますもの。

(また本に戻る。この時まで、もう一人のウエイトレス、ドリーンがはいってきていて、ファウラーに近づいている。)

ドリーン すみません、ファウラーさん。グーラッシュはもうおしまいなんです。

(ファウラー、ぼんやりと見上げる。)

ファウラー え? ああ、じゃあコールドバイは?

ドリーン 私だったらそれはやめにするわ。はいっているものがものですもの。私ならタンにするけど。

ファウラー 分かった。じゃあ、それにしよ。

(ドリーン、台所に入る。)

レイルトンベル(マシスンに意味ありげに。)あの子は続

かないわ。きつと。

マシスン そうね。

レイルトンベル ですがグーラッシュがもうなくなるなんてどうかしているわ。まだ二人も残っているじゃありませんか。

マシスン そうね。

レイルトンベル 勿論、マルコムさんは時間通りに帰ったためにはないんですから(窓際の席を指さして。)食べるものがなくなっただって自業自得ですけど(もう一つ内緒の話があるという風に。)もっとも、いつもクラブであんなに飲んで帰ってくるんですもの。自分で何を食べているかわかったことなんかないんでしょう。きつと。でも今日着いたご婦人(別の空席を指差す)あの人はどう思っかしたら。

マシスン 私、あの人見たわ、着いた時。

レイルトンベル そう?

マシスン あなたは?

レイルトンベル(少し困って。)それは私、広間にはいたわ。でも こう言っはあなたに悪いけど わざわざ窓からのぞくのはね どうかと思って。

マシスン(きつぱりと。)私は広間にいたんではありませ

ん。玄関ホールにいたんです。

ミーチャム 私は階段のところで会ったわ。

レイルトンベル あら、そう?

ミーチャム(本から目を離さず。)(名前はシャンクランド、ミスイズ・シャンクランドね。ロンドンからだって。汽車で。スツーカーズ四つに帽子の箱。滞在予定は二週間。

レイルトンベル（不愉快だが、思わず感心する。）スーツケース四個？

ミーチャム それに帽子箱一個。

マシスン いいもの着ているの、それが。派手じゃなくって いい趣味・・・メイフェアなのよ。分かるでしょう、私の言っていること。

レイルトンベル そう。（このじぶんにとつて面白くない話題をはずそうと。）今日はとても暖かでない天気だったわね、グラデイス。十二月にしては、だけど。

マシスン 私、外に出なかつたの、今日。テレビのホームコンサートでシベリウスをやっていたので。

レイルトンベル また音楽？ あきれたわね。ファウラーさんは？

ファウラー え？ ああ。いや、出ませんでしたな。電話を待っていたんです。

レイルトンベル じゃあ外に出る勇気があったのは私だけ？ あらまあ。

（急に言い止める。玄関ホール側の扉開き、アン 新しい客 登場。約四十歳。入ってきてちよつと恥ずかしそうに辺りを見る。このホテルには全く場違いな雰囲気を持っている。服装がスマート過ぎるといってもない。もちろんスマートであるが 髪形が派手過ぎるのもない。勿論派手ではあるが。そういう個々のものではなく、彼女自身を持つ雰囲気、ベルグラビアなど、ロンドン一流のレストランにこそ相応しいものなのである。アン、まるでその高級レストランの給仕頭がテーブルに案内するのを待っているかの

ように立っている。他の客達、誰も彼女を見ない。ミーチャムに給仕していたメイベル、振り返ってアンを見る。）

メイベル 新しい方ですね。

アン ええ。

メイベル この席です。

（メイベル、中央の席を指差す。）

アン あ、有難う。

（テーブルに行き、座る。相変らず沈黙が支配している。メイベル、アンにメニューを渡す。アン、メニューをながめる。その間、他の客達、チラチラとアンを見る。）

メイベル スープはブラウン・ウインザーになさいますが、それともプッチット・マルミット？

アン スープはいいわ。グーラッシュを頂きます。

メイベル かしまりました。ちよつとですが残っています。4

（ファウラー、メイベルが彼を通り過ぎる時、睨みつける。しかし文句を言うのは思いとどまる。アン、辺りをみまわすと全員目を伏せる。沈黙が続いてやつとレイルトンベル夫人、

口を開く。心持ち、以前よりもっと上流の人間らしい言葉遣いにしようという意識あり。）

レイルトンベル（マシスンに） 十二月のお天気について

話していましたわね・・・

マシスン え？ ええ。

レイルトンベル（マシスンに）この頃のお天気って見かけで騙されてしまつた。特にこちら、南海岸ではそう。今日だつて外は太陽が燦燦と輝いているように見えたの。でも私、毛

皮のコートを着て出たわ。それも一番暖かいペルシャラムの
コートを。

マシスン それは用意がよかったわね。

(若い二人急に立ち上がり、広間の扉に進む。二人とも本を
持って。我々の見る限り、二人はまだ一言も口をきいていな
い。レイルトンベル、二人を軽蔑の目で追う。)

レイルトンベル(あの子) 晚餐にスラックスを履いてくる
なんて。

マシスン そう、失礼ね。

レイルトンベル 男の方だつてそう。態度がちつとも変わ
りはない。ミス・クーパーは、何も言わないのかしら。そ
れにオックスフォードではいいお行儀つていうものを教えて
いるはずじゃないの。

マシスン そうよ。そのはず。(少しの間のあと) 私の
夫、オックスフォード出だったの。

レイルトンベル(優しく) ええ、以前その話聞いたわ。う
ちのはパーミンガム。あそこのエンジニアリングコースが素
晴らしいからつて。でも嫌つていたわ。勿論。

(この時までにクーパー登場している。そしてアンの方に近
づいている。クーパーは若い雰囲気。男のような容貌に落ち
着いた態度。)

クーパー 今晚は、ミシイズ・レイルトンベル。

レイルトンベル 今晚は、ミス・クーパー。

クーパー 今晚は、レイデイ マシスン。

マシスン 今晚は。

(ミーチャム、見上げない。クーパー、そのまま進んでアン

のテーブルに達する。)

クーパー 御不自由な点はありませんか、ミシイズ・シャ
ンクランド。

アン いいえ、何も。

クーパー テーブルに御案内すべきでしたのに失礼しまし
た。ロンドンから丁度電話がかかつてきました。お料理など
伺つていますかしら。

アン ええ、有難つ。

(この時までにメイベル料理を運んできていて、アンの前に
置く。)

クーパー(鋭く。) スープは?

アン いいんです。スープは飲まないことにして居るんで
す。脂肪がつくので。

クーパー あら、そんなことを注意しなければなりません
の? 想像もつきませんでしたけど、ミシイズ・シャンクラ
ンド。

アン 注意しないといけないんですわ。モデルの仕事です
から。

クーパー ここには暫く休養のためつていうことですか?

アン ええ、そう。

クーパー お部屋が快適だといんですけど。

アン ええ、それはきつと。

クーパー 御不便なことがありましたら、どうぞご遠慮な
くお申し付け下さいね。

アン ええ、有難つ。

(クーパー、アンに親しみのほほえみを与え、振り返るとぱつ

と真面目な顔になっている。窓ぎわの空の席を見、仕草でメイベルを呼ぶ。）

クーパー メイベル、マルコムさんの部屋へ行って。

メイベル 行って来ました。いらっしやらないんです。

クーパー そう。あの方に温かい料理を何かとってあるんですね。

メイベル はい。でも、もう五分以内にいらっしやらないと、冷たいものを召し上がって戴くようになります、と裏で話していますけど。

クーパー そう。それまでにはいらっしやるでしょう。

(メイベル、疑わしそうな顔。クーパー玄関の扉に進む。ファウラー、テーブルから立ち上がり、クーパーを止める。)

ファウラー さっきロンドンからの電話とが言っていましたね。

クーパー ああ、あの電話、あれはちがいます、ファウラーさん。あなたの生徒さんからの電話ではありませんでしたわ。ポロツク少佐からの、次の滞在地の住所を知らせておきます、と。

レイルトンベル ロンドンから長距離？ まあ随分警沢なこと。少佐にしては。

クーパー (かすかな微笑み。) 御友人宅からの電話のようでしたわ。来週の火曜日に帰るからとのお話でした。

ミーチャム (本から目を離さず。) 帰らなくってもいいのに。あんなくたらない奴。

ファウラー フィリップのやつどうしたんだらう。駅に迎えに来てくれて言ったって、何時の汽車が分からないんじゃないや。

クーパー こちらからお電話は？

ファウラー エエ、二度。出ないんです。二度とも。もう一度かけてみるか。

(ポケットに手を入れて小銭をさぐる。)

クーパー もうちょっと遅すぎますわ、ファウラーさん。ロンドンからの汽車はどうせ一本しか残っていませんし。

ファウラー (扉へ行きかけながら。) 予約した部屋については御心配なく、ミス・クーパー。万一あいつが来ない時でも・・・これはないと思いますが・・・私が払いますから、必ず。

クーパー それは構いませんの、ファウラーさん。でもいらっしやるかどうかは、できるだけ早く知りたいんですけど・・・

(ファウラー、ホールの扉から退場。クーパー、テーブルから花瓶をとる。)

レイルトンベル (同情した声。) ご迷惑ですね、クーパーさん、これで三度目でしょうか？

クーパー 今度は大丈夫じゃないかしら。ただ電話をかけるのを忘れていただけ。放浪癖のある今の若い人達のやり方ご存じでしょうか？

(クーパー退場。)

レイルトンベル (マシスンに) 憚りさま。ご存じなんかあるもんですか、放浪癖のある今の若い者たち。なんていけすかないんでしょう。(内緒話のように声を低めて) ここにだっているじゃないの、ちゃんと一人。(頭で窓ぎわのテーブルをさし示す。) それにファウラーさんの生徒。しよっちゅ

う話にであるあの若い画家、あの人架空の人物じゃないかしら。疑わしくなつたわ、私。

マシスン 架空の人物じゃないわ。いつかその人の記事を見せてくれたわ。「現代絵画」にでていたのを。ファウラーさんの秘蔵っ子だったのね、トンブリッジで。本当にあの生徒のことを誇りにして話し始めると次から次に話題が出てくるの。聞いていると、ファウラーさんのあの人への優しさが伝わってくるわ。

レイルトンベル じゃあ、こんな風にあの人をすつぽかすなんて随分失礼な話ね。

ミーチャム 馬鹿馬鹿しい。

レイルトンベル (驚く。) なんですって？

ミーチャム 失礼でも何でもありません。私達おいばれの御用ずみが若い者たちに何を要求できるっていうんですか。思いやりを？ とんでもない。私達はもう人生を終えてしまつたの。若いものはこれから。私達を見て何が楽しいって言うの。ただ老人の惨めさと死を待つ姿だけ。私にはね、姪っこが二人いるの。二人ともそれは美人。そう、写真をお見せしたことがあつたわね。あの子達、私に近寄ろうともしない。当然のことよ。たとえ来たいって言つたって私の方からお断わりよ。こんな醜い姿になるのよって見せびらかす必要がどこにあるっていうの。

(ミーチャム、広間の方に行く。本を持って。)

レイルトンベル (マシスンの方に内緒話。) あの私、少し心配だわ。

マシスン そう、あの頃だんだんおかしく・・・普通

でなくなつてきているわ。

レイルトンベル あの、見たい夢だけを見るなんていう話だつて・・・ええ、私は別に害があるとは思っていないけど・・・精神科の医者だつたら何て言つか分らないわ。人間の心つてとても繊細に出来ているんでしょう。よく主人がそう言つていたわ。本当、どうなるか分かつたものではないわ。さあ、(威厳をもって立ち上がる。マシスンに。) 広間で待っていきましょうか。それともあなた、夜の音楽番組の方で予約ずみかしら。

マシスン いいえ。今夜は聴く価値のあるものはなかつたわ。

レイルトンベル じゃあ、広間でね。待つてらわ。

(堂々と広間の方へ退場。マシスン、デザートに手をつける。この時までには、アン、グーラッシュをつつくのを

終えている。深い沈黙が支配する。メイベル登場。)

メイベル (アンに。) はい、ターンオーバーです。もう一つのデザートよりお口にあつと思つて。

アン ああ、有難う。

(メイベル、皿を取り替え、退場。再び沈黙が支配する。扉がかなり乱暴に開かれ、ジョン・マルコム登場。四十代前半。くたびれた顔。身なりもきちんとしていない。髪はもしやもしや。口を開くとかすかに北部のなまりあり。素早く時計を見、それから台所の扉を見る。次に窓際のテーブルの方に進む。達するまでにアンの傍を通り過ぎねばならない。彼がアンの見るまでにすでにアン、彼を見ている。今では見つめている。表情を全く変えず、遠くから見ているかのような顔。)

ジョン、視線を感じてアンの方を向く。観客を背にしたまま、動き、全く止る。暫くの後、自分のテーブルに進み席につく。この席はアンと向かいあっている。ジョン、テーブルクロスを見つめる。ドリーン、入って来る。）

ドリーン あーら、帰ってきたのね。助かった。いつまでも残ってなきゃならないかと思つたわ。どこに行つてたの？クラブ？

ジョン うん。

ドリーン そうだと思つた。グーラッシュはもうないよ。メダイロンしか。

ジョン（まだテーブルクロスを見つめて。）それでいいよ。ドリーン スープはブラウン・ウインザー？いつものように。

ジョン うん。

（ドリーン退場。アン、ジョン、マシスン、三人、全く口をきかず。マシスン、デザートを終え、立ち上がり、広間に出る。この時ドリーン、ジョンのスープを持って登場。）

ドリーン ほら、スープ。さあ、かきこんだり、かきこんだり。でもまあクラブで水分をとりすぎていたら、もうはいらないかもしれないけど。

（ドリーン退場。ジョン、パンのかけらをもみつぶして屑にする。ゆっくりとテーブルクロスから目をあげ、アンを見つめる。）

ジョン（ようやく。）これは偶然なのか。

アン 勿論よ。

ジョン こんな所で何をしているんだ。

アン 仕事のあとの骨休め。
ジョン なぜここなんだ。ほかにいくらでもあるじゃないか。

アン 推薦があつたの。

ジョン 誰が推薦した。

アン どこかのパーティーで会つた人。

ジョン 僕がここにいるってそいつは言わなかつたのか。

アン 新聞記者がいるとは聞いていたわ。ジョン・マルコムつていう。あなたのこと？

ジョン そうだ。

アン ジョン・マルコム。ああ、そうね。あなたの洗礼名だつたわ。

ジョン（荒々しく。）どうしたんだ、一体全体。ロイヤルバース、ノーフォーク、ブランクサム・タワーズ、いくらでもあるじゃないか、一流のホテルは。どうしたんだ、一体。（ドリーンが来るのを見て言いやめる。）

ドリーン あとは何にする？ だつてコックはもうそろそろ終の時間なの。ターンオーバーが一番いいよ。

ジョン それにする。

ドリーン スープは終？

ジョン うん。

ドリーン 触つてもいいのね。やっぱり水分のとりすぎ・

（スープを持って台所に退場。）

アン 一流のホテルなんて余裕なかつたの。

ジョン 別居手当てはでているんだろつ。

アン 年七百五十よ。楽じゃないわ。いつも仕事はある訳じゃないし。

ジョン あいつ金持ちだと思っただがな。

アン マイケルが？ いいえ、骨董屋でずいぶん損をしたの。

ジョン 新聞なんかではひどく名前が売れているがな。

アン そつ。たいした名士。初日はかさず見に行くとか、そんなことではね。

ジョン 正確には何年一緒だったんだ。

アン 三年と六箇月。

ジョン 僕の方が六箇月負か。あの時の新聞の見だしは見たよ。かなり人目を惹くものだったな。だけど我々の時にはかなわなかった。君だって認めるだろう、それは。慥かまた暴力だったな。

アン ええ。

ジョン あいつも君を殺そうとしたのか。

アン (静かに。) いいえ。

(ドリーン、ジョンのメインディッシュを運んでくる。)

ドリーン ほーら、メダイロンよ。いつもの野菜？ (ジョン、うなずく。ドリーン、野菜をとりわける。)

今日はおさぎの虫ね、どつかしたの？

ジョン いや。

ドリーン ならいいけど。早く食べてね。友達が待ってるのよ。

(ドリーン退場。ジョン、全く食事する気なし。)

ジョン あいつの暴力ってのはどんなものだったんだ。

アン 小出しに、手を変え、品を変えていう方法。とにかく女は嫌いだっていう言葉で要約されるわね。

ジョン じゃなぜ結婚なんかしたんだ。

アン 妻というものが欲しかったのね。

ジョン そして君は夫が欲しかった。(アン、頷く。)

君の最初の夫とはえらい違いだ。きみも一番目ので少しは懲りてもよかつたんじゃないか。

アン そうね。でもあの人優しくて親切で、笑わせてくれて、私、好きだったの。ちゃんと目を見開いて、冷静そのもので、自分の行動をはつきり見つめながら飛び込んで行ったの。今度は大丈夫だと思った。でも私の間違いだった。(ジョン突然笑う。)

何がおいしいの。

ジョン 女性雑誌のいい質問だな。女性達よ、どちらの夫を君達は望むか。君達を全く愛さない夫か、それとも愛し過ぎる夫か。(間のあと。)

次は大丈夫さ。三度目の正直だからな。

アン そうね。

(間。)

ジョン どのぐらいいるんだ、ここに。

アン 二週間の予約。

ジョン じゃあ、僕はロンドンに行く。

アン やめて、そんなに嫌なら私の方がよそのホテルに行くわ。

ジョン その方が楽だな。

(間。)

アン ジョン、どうして私がいたら・・・

ジョン　「このおばあちゃん連中がすぐ嗅ぎ付ける。君だつて分かるだろ。連中は一日中人の噂をして過ごしているんだ。僕らの話を嗅ぎ出すのに丸一日とかかりはしない。時間なんてくさるほどあるんだからな。それでなくつたつて僕のことを怪しいと思っっているんだ。ケイトーのペンネームで僕がニューアウトルックに記事を書いているのをもう知つていやがる。どうやって見つけ出したんだ。全く見当もつかない。だいたい連中はニューアウトルックみたいなまっかつかの新聞には触るのだつて汚らわしいと思っっているはずなんだ。それなのに……」

アン　私は毎週読んでいるわ。

ジョン　としとつてから赤に転向か。

アン（静かに。）としとつて？

ジョン　何歳なんだ、君は。

アン　あなたに最後に会つた時の年に八をたした数。これでいいでしょう。

ジョン　うん。その年には見えない。

アン　有難う。でも自分ではそれを感じるわ。

（間。）

ジョン　僕がぶちこまれていた時どうして来てくれなかった。

アン　行きたかつたわ。でもとめられていたの。

ジョン　誰だ。とめた奴は。

アン　父と母。

ジョン　牢番の目の前で君をしめ殺すんじゃないかと思つたんだろ。君の依頼した弁護士をもう少しでしめ殺しそ

うになつたんだから無理もないか。

アン　私があれば余計あなたがつらくなるからつて。

ジョン　育ちのよいキリスト教的な考えだ。僕の義理のこ両親様、どうしてる？

アン　父は死んだわ。母はだいたいこういう風なところ、ケンシントンの。

（間。ジョン、アンを熱心に見つめる。）

ジョン（やつと。）じゃあ明日は出て行つてくれるんだな。

アン　ええ。

ジョン　それは有り難い。（硬く。）無理矢理不便をかせせてすまない。

アン　いいの。それは。

（ジョン、急にテーブルから立ち上がりアンに近づく。アン素早く立ち上がる。）

ジョン　さてと、別れの挨拶は……握手でもするのか。

アン　また会えて嬉しかつたわ、ジョン。

（アン、ジョンの頬に優しくキスする。）

ジョン　同じ言葉が返せないのは僕が野暮で、田舎者で、乱暴者だからだ。許してくれ、アン。しかしどうせ野暮で乱暴者なんだからしかたがない。実際にそれを証明するものがあるからな。君の頭の左側には、まだあの傷跡が残っているだろ。

アン　もうなくなつたわ。

ジョン　なくなつた？　五針縫つて一週間の入院の傷が？

アン　八年たてば大抵の傷跡はなくなるものよ。

ジョン　大抵のはね。分かる。しかし全部じゃない。じゃ

あこれで。おやすみ。

(ホールの扉に進む。達するまでにクーパー登場。)

クーパー ミスミス・シャンクランド (ジョンを見て)

ああ、今晚は、マルコムさん。

ジョン 今晚は。

(クーパーの脇を通り過ぎようとする。)

クーパー あら、マルコムさん、食事で何かありましたか？

私がいまませんでしたから何か行き届かないことが・・・

ジョン 食事はすみました。有難う。ちょっと外出して来ます。

クーパー あら(心配の気持ち。)ひどい夜ですわ。マルコムさん。どしゃ降りになってきたんですよ。

ジョン 雨？ 雨なんか。

(玄關ホールに出る。)

クーパー (後を追って。)じゃあ玄關をあげなくちゃ。もう閉めてしまっているんです。ちょっと失礼。ミスミス・シャンクランド。

(後を追って退場。アン一人残されて再び椅子に座る。長い間。手鏡を出して自分の顔を眺める。クーパー帰ってくる。)

クーパー 広間にコーヒーをだしますので、ミスミス・シャンクランド。夕食がおすみになったら、ここの他のお客様達にご紹介致しますわ。新しいお客様と最初なかなか打ち解けないっていうことが時々ありますの。どうしてでしょう。

(私には分かりません。)とにかく、お客様に寂しい思いをおかけしないようにと心がけていますの。(打ち解けた風に)寂しきって本当に恐ろしいことですもの。違つかしら。

アン ええ、そう。恐ろしいことですわ。

(アン、テーブルから立ち上がる。)

クーパー あら、おすみですか、じゃ一緒に参りましょう。広間はこちらなんです。

(広間の扉の方へ案内する。)

アン ええ、では・・・

(暗転)

第二場

(場面 広間。二時間後。食堂に行く扉は右手に、玄關ホールに通じる扉は中央奥。左手にフレンチウインドウ。今はカーテンが閉められている。硝子を打つ雨の音。右手に暖炉。電気ストーブがついている。チャールズとジンだけが部屋にいる。二人一つのソファの両側に座って熱心に本を読んでいる。時々メモを取る。)

チャールズ(長い沈黙を破って、本の方を向いたまま。)

嵐になりそうだな。

ジン 私濡れるの嫌い。

チャールズ(間のあと。)(皆はどこへ行ったんだ。

ジン 新しく来た人は自分の部屋、女王様と鼠のおともはテレビのある部屋、カール・マルクス氏は外で飲んだくれている。チップス先生は画家の、昔の生徒に電話中。

チャールズ あいつは来っこない。

ジン 勿論来っこないわ。(本を閉じ、伸びをする。)

私、この本おしまい。解剖学の進み具合どう？

チャールズ 君が口を開かなければ、進むんだがな。

ジン（窓の方へ行き。）この話、私が始めたんじゃないわ、あなたよ。あなたのお父様、私のことご存じ？

チャールズ（メモを取りながら。）うん。

ジン 何て言ったの。

チャールズ 何が？

（ジン、チャールズの本をひっくり返して彼の膝にのせる。読む邪魔である。）

ジン なんてお父様には話したの。

チャールズ やめてくれよ、ジン。このリンパ管のやつ、なかなか難物なんだ。丁度面倒くさいところにさしかかっているんだ。

ジン 何てお父様には話したの。

チャールズ（怒って）えーい、くそ。うるさいな。二人は恋愛関係にあつて結婚するつもりだって言ったぞ。

（チャールズ、本を元に戻し、またかがみこんで、メモをとろうとする。）

ジン じゃあ、まっかな嘘を話したのね 結婚するだなんて。

チャールズ なんだつて？ ああ、そんな風な言い方をしなきゃ、親父にはわかりっこないじゃないか。なあ、もう黙ってくれよ。

ジン このへんでやめた方がいいのよ。これ以上やたらまた眠れなくなつて年よりふけちゃつわ。

（チャールズ、本を取られるままにする。）

チャールズ それもそうか。ページを分からなくしないでくれよ。（伸びをする。）畜生、年より早くふけるか。ふけ

る 老人 年寄つてみんなここにいる連中みたいに惨めなのかな。ひどいもんだ、ここは。

ジン 惨めじゃないわ、ちつとも。夢のおばあちゃんを見てご覧なさい。いつだつてウキウキしているじゃないの。

（死んだ）歴史上の人物と意思を通じあったり、競馬の結果を待ち焦がれたり。女王様だつて幸せよ。銀狐の毛皮をまつて、威風堂々じゃないの。身のまわりの世話はあの人の娘さんがやくし……

チャールズ あの人に娘さんがいるの？

ジン あなた、何を聞いているの？ あの可愛い娘のシビルの話をしないで夜も日もあけないじゃないの。うちの子は私とは親子の関係じゃありません。友達の関係なんですよ。うちの子は私なしでは生きてゆけないんですの……

チャールズ へえー？ その娘さん、ここであいつと一緒に暮らしてらつて？ 驚いたな。そりゃ散々な人生だ。僕は見たことがないけど……

ジン 二週間ばかり伯母さんのところへ行つて話だわ、どうやら。とにかくあの女王様、猛烈な自己中心主義で、とても不幸なんかにほなれやしない。鼠のおともちゃんも確かにしょんぼりしていて灰色の人生だわね。でもあの人だつて楽しみにしている音楽があるわ。チップス先生は昔の教え子がいるじゃない。もっとも会えたためしはないけれど……カール・マルクス氏は……そつね……

チャールズ 見てみる。カール・マルクス氏が惨めでないとは言わせないぞ。あいつぐらい惨めな敗残者は見たことがないな。

ジーン それほどでもないんじゃない。まず飲んだくれる楽しみ。ニューアウトルックに載る自分の記事。何か過去に横たわる薄暗い事件。それに時々仄めかす昔の栄光。(真面目に。) 違う、チャールズ、私がホントに惨めな人だと思っている人、このホテルにいるんだけど、それ誰だか分かる？

チャールズ ミス・クーパー？

ジーン(軽蔑的に。) ミス・クーパー。惨めであるもんですか。ここをうまくキリモリしているじゃない。トイレに注意書きをベタベタ張り付けたり。はつらつだわ。いいえ、新しく来た女の人。

チャールズ ミス・スイズ・シャンクランド？ だけど君、一目見ただけだろ？ 一時間前に。

ジーン 女は女の目をごまかせないの。いくら綺麗な服を着たって、陽気にふるまったって、明るい笑顔を見せたって。なにかひどい目にあつたのね、あの人。だって、一体こんなところで何をしようって言うの。あの姿、形、顔、それにあんなにちゃんと着飾って・・・ロイヤル・バース・ホテルかなにか、それでやっとなり合いが取れるのに・・・(暗い表情。) それにあの人結婚指輪していなかったわ。

チャールズ なーんだ、ジーン。君にまでここのおばあちゃん連の噂癪がうつつたのかい。こわれているのかもしれないじゃないか。

ジーン 私の結婚観は私達二人にだけ通用するの。私はキャリヤウーマンになる予定。あなたは有名な外科医になって、診察室に自分の子供達がウロチョロは駄目。つまり子供はいらない。でも普通の人は思慮が足りないの。私達とは違う。

結婚して思った通りにいかなくなると惨めになるの。ありがたいことに、私達はそうはならない。一人で自己完結してるの。少なくとも私はそう。だからあなたもそうであってほしいわ。

チャールズ じゃあ来てキスしてくれよ。僕が一人でどれだけ自己完結しているか見せてやるよ。

ジーン そのカラーに口紅がつくのがおちよ。それでおばあちゃん達に見破られちゃう。

チャールズ ねえ、ジーン、時々僕はね、君が少しは自己完結してなくて、僕を頼ってもいいのになという気になるんだがな。

(チャールズ、大股に進み、ジーンにキスする。ジーンも抱擁を楽しんでいる様子。ホールに声。)

チャールズ 畜生！

ジーン(落ち着いて。) 口を拭いて。

チャールズ ほっとけ！ あいつらだって若者のいちやいやぐらい知ってなきゃならんはずだぜ。

ジーン 知ってはいるでしょう。でも好きじゃないわ。

(レイルトンベル、マシスン登場。)

レイルトンベル そう、あの人あざやかだったわ。あの改革派の論敵を徹底的に論破して・・・(冷たく。) 今晚は。お勉強は終？

チャールズとジーン(同時に。) ええ。ええ、終わりました。これから上になるところです。

レイルトンベル おやすみなさい。

チャールズ、ジーン(同時に。) おやすみなさい、ミシイ

ズ・レイルトンベル。おやすみなさい、レイディ・マシスン。

(二人退場。)

レイルトンベル あの人達いちゃいちゃしてたのよ。

マシスン どうして分かるの。

レイルトンベル あの目つき。私がいってきたら慌ててハンカチで口を拭っていたわ。口紅がついていた。

マシスン じゃあ恋人同志ね。何かあるとは思っていたわ。

レイルトンベル でもここには勉強のためだけに来たことになっているのよ。昔馴染みとか何とか言って。ミス・クーパーが聞いた話はそう。もし恋人同志ならどうしてそう言わないんでしょう。私、こそこそするのは大嫌い。あら、何の話でしたっけ、

(二人暖炉のそばの椅子に座る。席は決まっている様子。)

マシスン テレビの討論会。素敵な論客の話。

レイルトンベル そうそう。あの人の素晴らしい論点があったわね。何でしたっけ。

(外からフレンチウィンドウが開かれ、カーテンが内側に激しくはためく。)

レイルトンベル あら、まあ。

(膨らんだカーテンの中からやっとこさ、ジョン現われる。)

レイルトンベル 早く、早く、閉めて。風がはいつてきま

す。

ジョン 風？ ああ、そうか。

(ジョン、再びカーテンの中に隠れる。レイルトンベル、マシスンと無言で言葉を交わす。その口は「酔っ払い」を示

している。)

マシスン あの人が言っていたのは何だったかしら。そうそう。国民総生産をどうするか。つまり国家のパイをどうするのか、と。

(ジョン、やつのことでフレンチウィンドウを閉める。

再びカーテンから出て来て、レインコートのまま火の傍の椅子に進み、両手を暖める。二人の婦人、これを見る。レイルトンベル、彼の存在を無視することに決める。)

レイルトンベル それで思い出したわ。生活水準を上げるとか、下げるとかの話の時にあの人が出した素晴らしい解答よ。覚えてる？ こう言ったのよ。社会主義者達はただただ国家のパイを平等に切って分配することしか念頭にないが、保守主義者達はこのパイ自身を大きくしようとしているのだけだ。

(レイルトンベル、ジョンを見る。「これが聞こえたか」と言わんばかり。ジョン相変らず両手を火にかざしたまま、聞こえている様子なし。)

レイルトンベル それからこう言ったわ。今の段階で労賃を上げることはパイが小さいままでそれを細かく切って・・・

ジョン(ぶつきら棒に。)

誰が言ったんです、それを。)

レイルトンベル サー・ロジャー・ウイリアムスン。テレビで。

ジョン あいつが言いそうな事だ。

レイルトンベル(憤然として。)

どうやらあの方の意見に反対のご様子ですね、マルコムさん。)

ジョン 勿論反対です。僕が反対することくらい先刻ご承

知じやありませんか。反対とか賛成を言っているのではありません。僕が不思議に思うのは、何故選りに選ってあんな馬鹿をテレビに出したかっていうことです。保守党にはいくらでもいい人材がいるのです。あんな作り声をしたオットセイの間抜け面を出さなくてもね。おまけにあいつの考えときたら知恵遅れの八歳の子供にも劣るっていうのに。

レイルトンベル それは私達のサー・ロジャー 観とはちがいますわね。

(ジョン沈黙。一瞬何か思い出に耽っている様子。)

ジョン ロジャーのやつもかわいそつに。女遊びがひどかったんだ。どうしてもこの際少々でも泡銭(あぶくぜに)をかせぐ必要があつたんだ。

レイルトンベル(あつけにとられて暫く口もきけない。)
そんな立ち入ったことをおっしゃると言つのはサー・ロジャーと個人的なお付き合いがあたりだったということなんですわ、マルコムさん。

(ジョン振り向く。あたかもこんな女がここにいたのか、という表情。)

ジョン いや、會つたこともありません。

レイルトンベル じゃ、あなたにどういう権利があつて・・・

ジョン 何の権利もありません。噂です。噂。それだけ。

レイルトンベル 随分人を侮辱した話ですわね。失礼ですが。

ジョン そつです。この話が真実だとすると、もつと侮辱したことになるでしょう。ところでサー・ロジャーは他にどんなことを言いましたか。造船労働者のサボター ジュについ

て何か言いましたか。

レイルトンベル よくご存じですこと。言っていましたわ。

だいたい造船労働者には愛国心のかけらもないのか・・・

ジョン 連中ぐらい愛国心のある人間はイギリス中どこをさがしたってはいはしない。

レイルトンベル そのおっしゃり方、随分強うございますわね。噂でお聞きになっただけの話ではないような。

ジョン ええ、聞いただけの話とはちがいます。私自身昔ドックで働いていましたから。

(間。)

レイルトンベル(やつと。)(そう伺つても、こつ申し上げでは失礼かもしれませんが、私ちつとも驚きませんわ。

ジョン 驚かれない。まあそうでしょう。こちらも驚かれないと聞いて驚きませんから。(軽くゲップをする。)(失礼。)

ウイスキーの飲み過ぎで・・・

(ジョン、座る。レインコートのまま。レイルトンベルとマシスン、お互いに目配せする。ジョン、それを遮る。)

ジョン 身体はあつたまりますからね。ところでお二人はニューアウトルックをお読みになつていらつしやる?

レイルトンベル あんなもの読むものですか。手が穢れるだけですわ。

マシスン 私、時々は見ます。ええ。(急いで。)(でも勿論政治面ではありませんわ。あれにはとてもいい音楽評論が載っていますから。

ジョン なるほど。するとあなたですか。ケイトーの正体が私だと見破つたのは。切れる頭ですな、なかなか。しかし

どうして分かったんです。

マシスン（混乱して。）エー、いつかあそこのテーブルにタイプ打ちの原稿が置きっぱなしになっていたんです。何か分からないまま手に取ってちよつと最初の一節だけを読んだのですわ。それ以上は読みませんでした。でも一週間くらい経った後、印刷になったものを見た時、それと分かるには十分でしたわ。

ジョン そうか。じゃ僕の失策だったんだ。これは恨んでいた僕が悪かった。（再びゲップをする。）失礼。それは何について書いたものでしたっけ。

マシスン 配当と賃金について。

ジョン 読んだのですか。全部？

マシスン ええ。

ジョン で、ご感想は？

マシスン（思いがけない勢いで。）お聞きになりましたからお答え致しますけど、あれは呆れ返った議論ですわ。本当に呆れ返った。もう少しであなた宛に投書しようと思った位ですわ。

ジョン なさればよかった。僕は反論されるのが好きなんです。しかしどうやらこの問題を個人的なこととして受け取っていらつしやるようにお見受けしましたが。

マシスン 個人的なこととして受け取りましたとも、勿論。

他に考えようがあるでしょうか。申し上げておかなければならないのは、私は現在造船労働者の所得の半分以下で生計をたてていかねばならないということです。夫は国家公務員でした。が、年金制度が実施になる前に亡くなったのです。そ

れでも残された金額は当時、配当金によって生活するに十分に思われました。しかし今となつては……

ジョン わかります。現在あなたはラジオを修理に出すのもままならない。ラジオはあなたの命だというのに。去年ここで値上げがあつた時、あなたはうしろの小さな部屋に移らざるをえなかつた。大好きな映画は週に一度。それも最前列の安い席。多分ニューアウトルックを買う余裕もない。これは人から借りてお読みになる。要約すれば、中流の水準をどんなに下にとつたところでああなたの生活水準は貧困の最低線に近い。さてレイデイ・マシスン、私は困窮者の味方、常に彼らに同情を払つてきました。従つてあなたも私の同情を得て然る可き人物なのです。

マシスン 結構です。あなたの同情などなしに十分やっていけます。

ジョン そうでしょうか。でも、あなたの不幸の原因は我々ですよ。我々革新派の改革の犠牲になつたのです、あなたは。あなたばかりではありません。ミス・ミーチャムも、フアウラー氏も、他の人達も。従つて我々革新派の同情に当然訴えるべきなのです、レイデイ・マシスン。

マシスン 革新派に一票を投ずることによつてでしょうか。

ジョン それが最も現実的な方法でしょう、当面。

マシスン（しつかりと。）なんていう破廉恥な、死んでもしませんわ。

レイルトンベル ちよつとお尋ねしますけど、犠牲者のお話の時何故私の名前が出なかつたのかしら。

ジョン あなたは、まだ犠牲者のうちに、はいつていない

からです。そのうち我々の不労所得に対する課税法案が通るでしょう。するとあなたの後生大事に守ってきた少々の蓄えもすっかりガタがくることになります。(その時になってから我々に同情を求めに來られることですね。)

レイルトンベル(カンカンに怒って、マシスンに。) グラデイス、行きましょう。マルコムさんにはここでゆっくり寝て、頭を冷やして貰いましょう。

(二人立ち上がる。)

ジョン ああ、あちらにいらつしゃいますか。では礼儀だけは守るとしまして・・・

(ジョン、椅子から立とうとする。足ふらつく。)

ジョン いや、なかなか楽しい会話でしたな。お忘れなく、次の選挙には、革新に清き一票を。

レイルトンベル 私達がいけなかったんだわ、グラデイス。こんな赤の飲んだくれの議論に巻き込まれるなんて。

(明らかにこれを捨て台詞にしようとしていた様子。しかし退場のタイミングをうまくこれに合わせる。)

きない。丁度マシスンが一生懸命何かを捜しているからである。)

レイルトンベル(いらいらして。) さあ、グラデイス、行きましょう。

マシスン 読書用の眼鏡が何処かへ行ってしまつて。

(クーパー、コーヒーポットとカップの盆を持って登場。)

クーパー (明るく。) ここにいらしたの。ミス・レイルトンベル。お待ちになりました? コーヒーをお持ちしました。

レイルトンベル(含みのある言い方。) 有難う、ミス・クーパー。でも今夜はコーヒーはいりませんわ。私。

(いらいらと、マシスンに。) まだ見つからないの、グラデイス。

マシスン 椅子の方をもつ一度見てみるわ。

(マシスン、自分の椅子の方へ進む。その間クーパー素早く見回し。これまでの状況を推測する。盆を置き、きつい顔でジョンを見つめる。)

クーパー(管理者の声。) マルコムさん、フレンチウインドウから入ってきましたね。

ジョン(従順に。) ええ。

クーパー このホテルはそれを禁じているのです。ご存じですわ。

ジョン 忘れていました。すみません。

クーパー 床中泥だらけですよ。(彼の椅子に近づいて。) あら、レインコートを着たまま椅子に座って、椅子がびしょ濡れ。

ジョン すみません。

クーパー 早くそのレインコートをかけて来てください。そのためにもちゃんとハンガーが用意されているんじゃないですか。それから靴もマットで拭いてきて下さい。そのためにもマットですよ。

ジョン 分かりました。すみません。

(ジョン、レイルトンベルの横を通り、ホールに出る。マシスン、相変らず、椅子のあたりを捜している。)

クーパー(心配そうに。) なにか不都合なことがございま

したの？

レイルトンベル 不都合！ 不都合で済めば結構なこと。

クーパー あら！ どんなことでしたの。

レイルトンベル 今はお話したくありません。（非常にいららんと。）お願い、グラデイス。何をぐずぐずしてるの？

あの嫌な男、又入ってくるわよ。早くしないと。

マシスン（嬉しそうに。） あったわ、やっと。椅子の下にあったのよ。

レイルトンベル どうして真つ先にそこを捜さなかったんでしょね。すぐ分かりそうなものなのに。

マシスン 夕食の後、私ファウラーさんの椅子に座ったの。

だつて新しく来たあの人が私の椅子に座っているんですもの。そりゃ知らないんだから無理もないけど……で、私……

レイルトンベル そんなことどうでもいいわ。早く行きましょ。早く。

（扉を通る時マシスンに「シート」と唇に指を立てる。クーパーの方に向き直り。）

レイルトンベル 明日朝食後にお話がありますわ、ミスクーパー。おやすみなさい。

クーパー おやすみなさい。ミスイズ・レイルトンベル。（レイルトンベル退場。クーパー溜息をつく。ジョンが座っていた椅子に進み、そこからクッションを取り、火の傍に置く。ファウラー登場。書き物机に進む。）

ファウラー ああ、ここでしたか、ミス・クーパー。メモ用紙を取りに来たんです。

クーパー 電話、通じました？ ファウラーさん。

ファウラー 駄目です。もちろん何度でもやってみるつもりですが、とにかく何かの間違いですよ。電報を出したけど、この宛名がちゃんと書いてなかったとか、そんな。

クーパー そうでしょうねえ。

ファウラー 夜つびて誰かに起きていて貰う訳にはいきません。私の部屋から玄関のベルは聞こえますから、私が自分で開けてもよろしいでしょうが。

クーパー それは一向に構いませんけど、でも、こんな時間になつてまだいらつしやる可能性があるとお思ひですの？

ファウラー 車を拾つて来るかもしれないから。ご存じでしょう？ 出費など全く気にならない男ですから。あいつは

ああいつた絵かきの連中のやること。ではまあ、おやすみ。クーパー おやすみなさい。ファウラーさん。

（ファウラー退場。クーパーあちこち歩いて絨毯の泥を調べ、陰気に椅子に座る。クーパー、一つ一つ紙で泥を拭く。紙屑箱へ行き、その紙を捨てる。レイルトンベルに断られた珈琲に進み、カップに注ぐ。ミルクは入れず二つ砂糖を入れる。黙つてそれをジョンに渡す。ジョン受け取り、クーパーを見ながらすする。クーパー、彼の椅子の腕に座り、優しく自分の頭をジョンの肩に乗せる。）

クーパー（優しく。） ひどく酔つてるの？

ジョン いや。

クーパー 何杯飲んだの。

ジョン 金のある限り。たいした有り金じゃなかった。

（間。クーパー、ジョンの手をとる。）

クーパー 何かあったのね。

ジョン 何かというほどのこともないが・・・

クーパー 話して戴けない？

ジョン これは無理だ。

クーパー (陽気に。) じゃ、いいわ。おばあちゃん達には何を話したの。

ジョン 喋り過ぎだ。なんてアホなんだ。俺って奴は。

(ジョン、コーヒーを置く。立ち上がったってクーパーから離れる。クーパー心配そうに彼を見る。)

ジョン ここを出て行かなきゃならん。

クーパー (強く。) それは駄目！

ジョン 駄目でも駄目だ。きつと。

クーパー 駄目でないようにはします。あの人は任せて。

でも、そんなにひどいことを？

ジョン (苦々しく。) それほどでもなかったと思うんだが。

ただ酔いにまかせていつもの持論をぶちまけた。見せびらかしだ。二人のおばあちゃんを前にして僕がどんなに頭の切れる政治評論家かっていうところをね。ちらちらと僕の過去がいかに偉大であったか仄めかして。おまけにドックで働いていたことがあるとまで口走った。馬鹿なことだ！

クーパー まあ。

ジョン ロジャー ウイリアムスンと付き合いがあったとまで。まあ、こいつはうまくごまかしたとは思つが。

クーパー ごまかしが効いていることを望むわ、私も。それが効いていなかったら、あの女王様、警察犬のように嗅ぎまわるわ。他には？

ジョン 分からない。考えたくない。朝になったら嫌でも思い出すよ、これは。(惨めに。) パット、すまない。

(ジョン、優しくクーパーに腕をまわす。)

クーパー 大丈夫、うまくごまかすわ。さあ、コーヒーを飲んで。

(ジョン、従順に再びカップをとりあげる。)

ジョン 何故俺はこんなことをするんだ。昔はちゃんと抑えられたのに。

クーパー (頬にキスしなから。) 過去が過去ですもの、無理はないわ。

ジョン 芝居の登場人物みたいに扱わなくてくれ。さつき自分でうんざりするくらいやったばかりなんだ。俺って奴は何でもない男だったのかもしれない。

クーパー 新聞の切り抜きを見せてくれたじゃない。ここ⁹に偉大な政治家の卵が・・・

ジョン 政治予想屋が勝ち目のない馬を本命と書きたてただけさ。何も起こらなければそのまま忘れ去られるし、僥倖で何かが起きれば、「見る、俺は二十年前にこのことを見抜いていたんだ。」って・・・

クーパー でも、あなたは三十にもならないうちにもう政務次官を務めたんでしょう？

ジョン (突然立ち上がり。) そうそうそう。こんなことはどうでもいいんだ。有望な若い政治家で、中年になって目が出ない奴なんて掃いて捨てるほどいるんだ。別にどうってことはない。全く何ってことはない。

(ジョン、この時まででクーパーから離れて立ち、床を見つ

めている。」

クーパー（静かに。）何かがあつたのね。これほど荒れる何か。話して下さるといいんだけど。

ジョン いや、これは話せない。言つたらう。だけど大事な事じゃないんだ。

クーパー ウィスキーを浴びなきゃならない程度には大事だつたんでしよう。

ジョン その程度の大事ならいくらでもあるよ。ウイリー・バーカーが大臣になつたと聞いた時は一本あけた。

（間）

クーパー もう一度戻れないかしら。

（ジョン、鋭く笑つ。）

ジョン そんなことになつてご覧。保守党の新聞は大喜びさ。ジョン・マルコム・ラムズデン氏、労働党代表として立候補する。思ひおこせば一九四五年期の政務次官であつたラムズデン氏は一九四六年、酔にまかせて彼の妻に暴行を働き、止めにはいつた警察官に襲いかかり、公務執行妨害のことで六ヶ月の禁固刑を申し渡された。見だし。監獄入りの有望株、再起す。御免だ。僕はジョン・マルコムで結構。新聞記者。中年の飲んだくれ。先頃までボーンマス・ボーリガード・ホテル在住。おばあさん連中の恐怖的。この方がずっといい。本当だ。

（ジョン、再び彼女から顔を背けている。クーパー、彼に静かに近寄り、両肩に両腕を置く。）

クーパー ねえ、ジョン。何かがあつたかは聞かないことにするわ。でも私に何かできないかしら。何か。

（ジョン、振り返り、クーパーを見つめる。）

ジョン（さつぱりと。）ねえ、バット、僕は君を愛しているんだ、誠実に。

クーパー（微笑む。）「誠実に」ねえ。お兄さんが妹に言うような言葉だわ。

ジョン（微笑み返す。）君はもう知っているじゃないか。僕の君に対する感情が肉親の愛をとくに越えていることを。

クーパー ええ。でも、そつは言つても……御免なさい。感謝していいような口ぶり……もつと証拠が……

（二人近づく。ホールの方から物音がする。二人自然に離れる。長い間の習慣のよう。アン、入つて来る。）

クーパー（明るく。）ああ、今晚は、ミスィズ・シャンクランド。もうおやすみになつていらつしやると……

アン ええ、上には上がったんですけど、まだベッドには……本を読んでいましたの。

クーパー あの部屋の椅子、如何でしたか。なかなかいいでしょう、座り心地。

アン ええ、大変。

（アン、入り口はいつたすぐの所に立つてジョンを見ている。ジョン、一目見ただけで視線を逸らす。）

クーパー 何か下に御用があたりでしたか、ミスィズ・シャンクランド。

アン（おずおずと。）いいえ、ただちよつと少しお話がしたいと思つたのですけど……マルコムさんと。

クーパー（再び明るく。）あら、お知り合ひでしたの？
アン ええ、随分昔。

クーパー え？

(クーパー、ジョンを見る。名前を隠している現在の状況から判断して「人違いです。」という言葉でジョンから期待するが、ジョン、何の反応も示さない。)

クーパー ああ、いいですね。ではどうぞお二人で。何か御用がありましたら暫くしてここに回って来ますから。

(クーパー退場。扉を閉める。アン、ジョンを見続ける。ジョン、相変らず彼女の視線を避けている。)

アン お互いに何も言わないでこのまま別れてしまいたくなかったの、ジョン。いけなかったかしら。

ジョン いけない？ 何がいけないんだ。

アン 夕食の時、テーブルから鉄砲玉みたいに跳びだして行ってしまったんですもの。私の顔を見るのもお嫌なのかと思つて。

ジョン(ゆつくりと、始めて真正面からアンを見る。君の顔を黙ってじつと見ることに、これだけだね、僕が君に関して嫌じゃないことは。

アン(少し笑う。神経質な笑い。) あら、それは聞いて嬉しいことではないわ。あまり。

ジョン 顔のことをほめられて嬉しいっていう時期はもう過ぎたのか。君のナルシズムはおわたったのか。

アン いいえ、まだあるわ、きつと。でもあなたから嫌われるのは嫌だわ。

ジョン ヘー、そうかな。昔は嫌われるのが好きだった。

アン それは誤解よ、ジョン。あなたいつだって誤解していた。

ジョン(静かに。) そうは思わないな、アン。君は僕から嫌われようとしていた。だから僕は君の行動が何か言いたることができたんだ。(僕の一番して欲しくないことをやるにきまつているんだからね。)

アン あなたは私がやる事は何でもお見通しだつていつでも言つていたわ。私、この言葉がひどく嫌いだつた。「お見通しだつた。」つて言われて、それが間違つていてるつて事を証明するのは不可能ですものね。

ジョン そう、そうそう。御尤もだ。もう上上がった方がいい、アン。そして明日静かにいなくなるんだ。その方がいいよ。本当。

アン いいえ、ジョン。もう少しさせて。私、座つてもいいかしら。

ジョン それは僕の行儀の悪さを指摘するためかい？

君が立っている間、僕は座つていちゃいけないつたんだ。

アン(優しく笑つて。) 随分お堅いわ。以前よりもつとお堅くなつたみたい。(座る。) あなたいつもお行儀がよかつたわ。

ジョン 違つな。チクチクとよく行儀を直されたな。

アン ええ、まあ時々ね。 私みたいに、あなたの事をよく分かつていない人が客に来た時は、仕方ないでしょう？

ジョン(微かに微笑む。) ああ、その答も分かつていた筈だなあ。ただ、今の場合少し時間が足りなかつた。

アン(微笑んで。) まあ、私のすることつてそんなにあなたには見えすいてるのかしら。それは最初の最初から？

ジョン うん。

アン　じゃあ、何故私と結婚を？

ジョン　また僕の返事を聞いて、君の自尊心を満足させた
いんだな。よろしい。何故ならあの時、僕は狂ったように君
が恋しかった。君への憧れで、胸は張り裂けそうだった。だ
から、君が頼むものは僕には何一つ断れなかった。結婚でさ
え断れなかったんだ。これが破滅に終わることを僕の理性が
冷徹に僕に告げていたにも拘わらずだ。

アン　何故それがそんなに破滅に終わる運命にあったのか
しら。

ジョン　階級の差だな、主に。

アン　階級？　まあ、それは馬鹿な話よ、ジョン。自分で
低い階級って決めて掛かっているせいだわ。

ジョン　いや、決めて掛かっているからだけじゃない。ケ
ンシントンゴアの高級住宅地とドック労働者のスラム街の差
はいまだに大きい。僕は、何度も君に話したが、八人家族で
育った。母親は子供を育てるため、亭主の無事安泰のため、
自分自身の健康と力と安逸を全て犠牲にした。僕はそれを見
て育った。だから僕の主婦観はどうしてもこれに影響を受け
ずにはいない。勿論僕は自分の妻にこれほどの自己犠牲を要
求しはしない。しかし最低線、つまり家庭の適切な切り盛り、
それに子供を生み育てる事、このぐらいいは（含まれているん
だ。）

アン（かっとなつて。）　子供については私は最初からはっ
きりさせていた筈・・・

ジョン　そう。君は、はつきりさせていた。名の通ったモ
デルは（自分の）子孫のために自分の容姿を犠牲にすべきで

はない。僕はこの条件は受け入れたんだ、アン。無条件にね。
僕には不満はないよ。

アン（怒って。）　あるのよ。ジョン。あなたには不満があ
るの。昔からちつとも変わっていないわ。あなたの不満、結
婚のその時から私があなたを愛していないって・・・

ジョン　ああ、またそれが。八年経ってまたそれをやらな
きゃならないのか。

アン　ええ。やらなきゃならないの。はつきりさせておく
必要があるわ。あなたは今認めたわ、結婚を望んだのは私の
方だったって。いい？　もしそれが本当なら　実際本当な
んですけど　愛以外の何が動機になったと言えて？　ええ、
まあ、あの頃、確かにあなたは政務次官だった。でも公平に
考えてみましょう。あの頃地位だけで言えばもつと高い人達
が私達の・・・

ジョン（遮って。）　分かっているよ、アン。細かいところま
でいまだに全部覚えてるんだ。男爵に、オーストラリアの
百万長者、それに映画のプロデューサー。

アン　そうでしょう、見てご覧なさい。

ジョン（静かに。）　君はこわかった。だから結婚したん
だ。三十になろうとしていた。もうこれからの人生は、自分
の姿を鏡に写していつも満足する訳にはいかない。容色とみ
に衰えるからね。自分に言い寄る男達を次々と軽くあしらう
楽しみもそう長くは続かない。その数はめつきり減るからね。

アン　いい台詞だわ、ジョン。でもそれは賣方を何故選ん
だかは説明していないわ。男爵でも百万長者でもいいはずよ。

ジョン　何故なら連中じゃあ、値段が払えないんだ。

アン 値段？

ジョン 君が自分につけた値段だ。嫌々ながらだが結婚するんだ。君は自分に値段をつけた。

アン 男爵の地位では買えない値段？

ジョン 買えない。

アン 百万長者でも？

ジョン 買えない。

アン その値段で、じゃあ、何？

ジョン 君が牛耳る権利。夫の隷属化だ。

アン あら、ジョン、何てお馬鹿さんなんでしょう。この

非難も昔にも聞いたわ。

ジョン そうだろうな。

アン 私が牛耳る権利だなんて。じゃあ、どうして貴方が相心しいの？ 他の人なら私が牛耳る権利を持ってないっていうの？

ジョン 違うよ、アン。連中は最初から牛耳られている。

雇っている庭師にまで牛耳られているような奴等だ。そんな奴を君が牛耳ったって面白くもなんともありはしない。君はもっと大きな獲物が欲しかった。荒々しい獲物だ。君は最大の武器を持っている。夫婦の交わりを拒絶するという武器だ。

君がその武器を使った時、あのおとなしい男爵だの、オーストラリアの百万長者だのに、何が出来るといふんだ。行儀が良すぎて抗議も出来はしない。ベッドの時間、それも丁度その時間に「私、頭痛がするの。」すると連中は言うのさ。

「そうか、かわいそうに。明日の朝には良くなるよ。気をつけるんだよ。そっぴあ、僕も今日は少し疲れたか。」とん

でもない、アン。こんな連中に君の大事な武器を使って何が面白い。この俺だっただろうだ。ドック労働者あがりの、本物の、生きている、おたけびも荒々しい野獣。こいつにその武器を使う。彼の当然の権利、甘い優しい接触、結合、あの喜び、それへの希求に彼をひれ伏させるのだ。ひれ伏すまいと彼が決心したらどうなる。浴びるほど飲んで、怒り狂って、鍵をかけて閉じ籠っている君の部屋を蹴破って、君を殴り倒して壁にぶっつけ、気絶させるのさ。これが本当に面白いっていうものなんだ。

アン（やっど。）まあ、呆れた、ジョン。なんていう話かしら。

ジョン そうだ。呆れた話だ。君は僕を許してくれなくちゃいけない。挫折した政治家の繰り事なんだ。それに今夜は普通以上に酔っ払っている。

アン（その言葉に縋るように。）私を見たため？

ジョン うん。

アン 御免なさい。

ジョン 君は御免とは思っちゃいないよ。

（アン、笑う。今ではかなり陽気に。自信が出てきたのである。）

アン あなた、変わらないわ。

ジョン そうか、変わらないか。

アン 昔からのジョン。ちっとも変わらない。本当のこと、半分本当のこと、それを歪めてみたこと、みんないっしょくたにして奔流のように吐き出すの。するとどういふ訳か、それらしい奇麗に筋の通った話になっている。貴方の話になっ

ているの。でも、人間てそんなに単純じゃないの、ジョン。
あなたの話のように。あなたは一番大切なことを全く考慮
に入れていないわ。

ジョン 大切なこと？

アン ええ。それはね、あなたはこの世界中で、私が好き
になつた、たつた一人の人っていうこと。私、今、「好き」つ
て言つたわ。「愛」っていう言葉を言わなかつた。貴方に反
論されないよう用心したの。煙草を頂戴。(ジョン自分のポ
ケットから箱を取り出す。) あら、まだこのひどい吸い口つ
きのを吸っているのね。私、自分のにするわ。バッグを取つ
て。

(アンの声に、優位に立つた者の強い響きあり。ジョン、従
順にバッグを渡す。アン、シガレットケースを取り出す。)

アン 私の「好き」っていうことに反論があるかしら。

ジョン 僕に言えることは、君の好き方は異常だつていう
ことだね。不意打ちで来るんだ。

アン 私、玄関の足拭きじゃありませんからね。時々は逆
襲しなければ。そうでしょう？

ジョン そうだろうな。武器の選び方だ、不公平なのは。
アン だって他に私には何もありませんもの。貴方には頭
があるし、雄弁があるし、私を安っぽい人間に思わせる能力
があるわ。今だつて早速やつたじゃないの。

ジョン 僕が？ それはすまない。

アン とにかく、敵の弱みに付け込むというのが戦争の鉄
則でしょう？

ジョン 戦争の鉄則だろうけど、結婚の鉄則ではないな。

アン 結婚も戦争のうちよ。

ジョン 君にとつてはね。

アン(微笑んで。)貴方にとつてもよ、ジョン。そうでな
いとは言わせないわ。

ジョン そして君が突く僕の弱点は、僕の君に対する気も
狂わんばかりの愛か。

アン そついつい言い方がいいなら、それでもいいけど、もつ
とスマートじゃない言い方もあるでしょう？

(訳註 「私の身体が欲しいだけ」という言い方もある、の
意)

(ジョン、沈黙。アン、ホルダーで煙草を吸っている。それ
をジョン、じつと見る。アン、今ではすっかり自信あり。)

アン それに貴方と私は、結婚生活のそちらの面では、お
互いに合意のとれたことは一度もなかつたわ。

ジョン そつ。なかつた。

アン どうしてそんなに見つめるの。

ジョン 理由は分かつているじゃないか。

アン(嬉しそうに。)ええ。でも止めて。困ってしまうわ。

ジョン そつか。

アン 本当に私、あまり変わっていないかしら。顔、形、
のことだけ。

ジョン(顔を見ずに。)全然。

アン メイキャップが上手なだけね、きつと。

ジョン そつは思わない。

アン 従順で頼りがいのある家庭の主婦がお望みなら、そ
ういう人と結婚すればよかつたじゃないの。ここで働いてい

るさっきの人なんか格好じゃない。そういえば、私が入ってきた時のあれ、ラブシーンでしょう？

ジョン ラブシーンか。君の言い方で言うとそうなるか。

アン どうしてあの人と結婚しなかったの。

ジョン 愛がないんだ。

アン そんなこと問題になるの？

ジョン ぼくは旧式でね。それは問題なんだ。

アン 「愛は生まれてくる。」そう言うわ。駄目なの？

あの人、貴方のタイプよ。

ジョン 世界中捜しても僕のタイプは唯一つだ。こんなことを君の前で認めるなんて全くいまいっただらありやしない。僕にはプライドもあるんだ。しかし自分のことで嘘をつくのは相変らず嫌いだからしかたがない。(再びアンを見て。)タイプは唯一つそれも原形がある。

アン(静かに。)嬉しいわ。

ジョン そうだろうと思った。ねえ、アン。君のこと褒めるとやはり今でもあの効果があるのかな。例のみぞおちにガシと一発食らうような。

アン ええ、あるわ。以前よりも余計あるくらい。だってもう私四十ですもの。ね、私年を言ってしまった。

ジョン さっき、計算はすんでいたよ。

(二人、静かに笑う。ジョン、アンのシガレットケースを取る。)

ジョン なかなかいい物だ。誰から？ 一番目の夫？

アン ええ。

ジョン 趣味がいい男だ。

アン 宝石に関してはね。

ジョン あいつに対してゴーサインを出したんだろうな。君に相応しい男に見えるものな。

アン 男じゃなかったわ、あの人、鼠ね。

ジョン あいつは君を褒めなかったのか。

アン 褒め過ぎ。ちつとも本気じゃないのに。

ジョン みぞおちにガンと来ない？

アン 全然。

(アン、突然ジョンの手を親しみある手つきで握る。)

アン ジョン、私、今不幸せなの。

ジョン それはまずいな。

アン あなたがよく言っていた、お前はこうなるぞって。その通りになってきたの。

ジョン 例えば？

アン 孤独・・・が、その一つね。

ジョン 友達がいらないのか。

アン 多くはいないわ。才能がないの。

ジョン 才能なんかいららないよ、友達を作るのに。自分に夢中にさせる、それには才能がいる。君はそれを持っている。

アン(苦く。)持っていたの。

ジョン 持っている。

アン とにかく私、独りぼっちは嫌い。ああ、本当に嫌い。例えばここ。寂しい生活。背筋が寒くなってくるわ。

ジョン(怪しむ気持ちなく。)じゃあ何故ここへ来たんだい。(ちよっとの間、アンぎくりとする。しかしすぐ落ち着きを

取り戻す。)

アン こんな風だなんて想像もつかなかったの。ああ、なんていう生活。あれが数年後の私の姿だわ。あの一人一人別々のテーブルに座っている私……

ジョン つきあってる人物は？

アン いないの。これは、という人は。それに時間はどんどん過ぎて行く。あつと言う間もないわ。

ジョン 僕の方は違った。この八年間、時間はほとんど進まなかった。

アン かわいそうに。ひどい生活だったのね、ジョン。(ジョンの手を強く握る。)でもこんな風にまた会えるなんて運がよかった。こない運を放つてはおけないわ。これからはお互いにもっと会うことにしましょう。だつて運命の女神がわざわざ私達をあわせてくれたのよ。想像も出来ない計らいだわ。なにかこれには意味があるのよ。明日私を追い出さないで。もう少しいさせて、お願い。

(ジョン、答えない。じつとアンを見つめる。)

アン(優しく。)(邪魔にならないようにするわ。)

(ジョン、まだ黙っている。じつと見つめたまま。)

アン 本当よ、ジョン、決して邪魔にならないようにするわ。

ジョン(やっと、重々しく、呟く。)(君は邪魔にはならないよ。)

(ジョン、突然激しくアンを抱擁する。アン反応する。暫くしてアン、何か言おうとする。)

ジョン(荒々しく。)(今は黙って。お願いだ。黙っていて

くれ。この瞬間をぶち壊しにしないで。

アン ねえ、ジョン。私、「ぶち壊し」になつても何か言わなきゃならないわ。ここは大広間よ。誰が来るかわからないわ、お願い。それからもう一つ。私の部屋はちよつと離れているの。ミス・クーパーが親切に、離れにしてくれたらしいわ。部屋の番号は……(ポケットから鍵をとりだす。)(十九。貴方のその吸い口つきのひどい煙草を頂戴。私丁度きらしてしまつた。

(ジョン、箱を取りだし、ぐいつとアンに差し出す。アン、一本取る。ジョン、ライターを持つ手を伸ばす。手が震えている。)

アン ああ……手が震えているわ。

(アン、ジョンの手を握つて自分の煙草に火をつける。ジョン、手を上着のポケットに入れ、いれた俣にする。アン立ち上がる。黙ってバッグを取り上げ、服の皺をのばし、髪を直し、ジョンの方を向く。)

アン 私いいかしら、これで。

ジョン(呟くような声。)(いい。)

アン(嬉しそうに投げキスをして。)(じゃあね、ジョン。)

ジョン(返事を仕草では返さず。)(じゃあ。)

アン 三十分後にね。

(アン、扉に進む。扉に達する前にクーパーの「ミシィズ・シャンクランド」と呼ぶ声がホールから聞こえる。アン立ち上がり、ジョンを振り返る。)

アン ほらね。

(扉開き、クーパー入つて来る。)

クーパー ああ、ミスイズ・シャンクランド。お電話です。
ロンドンから。

アン ロンドン？ 電話は何処ですか。
クーパー ご案内します。こちらです。

(二人出る。一人になるとジョン突然どつかと腰を下ろす。
膝がきかず、立っていられない。両手で頭を抱える。この姿
勢の時、クーパー帰る。暫くジョンを眺めた後、口を開く。)

クーパー あの人ね、そうでしょう。

ジョン 何が。

クーパー ミスイズ・シャンクランド。あの人なんですし
う。

ジョン うん。

クーパー 貴方が言っていた通りの人ね。氷で作った彫像。

そう表現した事があつたわ、貴方。

ジョン そうだったかな。

クーパー これからどうなるの、ジョン。

(ジョン答えず、クーパーを見る。間。)

クーパー (静かに、やっと。) そう。私には分かっていた
わ。貴方が今でもあの人を愛している、そしてこれからもずつ
とそうだろうっていうことが。このことで私をごまかそうな
んで貴方は一度もしたことはなかった……

ジョン (訴えるように。) パット、僕は……

クーパー いいえ、何も言わなくていいの。分かっている
の。じゃ、貴方、出て行くのね。

ジョン 分らない。ああ、僕には分らない。

クーパー 出て行くわ、きつと。あの人もう逃がしはしな

いつていう顔をしていた。わざわざこんな所まで貴方を追い
詰めにやって来たんですもの。決心も堅かった筈だわ。
ジョン わざわざ追い詰めに来たんじゃない。これは偶然
なんだ。

クーパー 偶然？ 本当にそんなことを信じているの？

ジョン うん。

クーパー じゃあ、分かったわ。もう何も言わない。

ジョン え？ 何かあるのか。

クーパー 何も無いわ。

(ジョン跳び上がり、荒々しくクーパーの腕を掴む。)

ジョン (猛烈な勢い。) 言つんだ。言え。言わないと……

クーパー (静かに。) 私を殴り倒さないで、ジョン。私、

あの人じゃないの。

(ジョン、手を緩める。)

クーパー 分かったわ。言います。もし偶然だとしたら何

故あの人、今ニューヨークの編集長と話をしているの
かしら。

ジョン 何だつて？

クーパー 編集長はワイルダーっていう名前でしょう？

ジョン そうだ。

クーパー 局番はターミナスね？

ジョン そうだ。

クーパー その人、貴方の正体も住所も知っているんでしょ
う？

ジョン そうだ。

クーパー その人、ウエストエンドにもよく行ってカクテ

ルパーティーなどに出席することもあるんでしょ？

(ジョン、ここで再び座る。「そうだ」の声なし。)

クーパー でも違うワイルダーさんかもしれない。一つ思いがけない偶然があつたんですもの、もう一つあつてもおかしくないわ。

(アン、戻つて来る。幸せで穏やかな表情。)

アン(クーパーに。)有難う、ミス・クーパー。私、もう上上がるわ。八時三十分にはモーニングコール、そしてお湯とレモンをお願いできるかしら。

クーパー かしこまりました。ミス・イズ・シャンクランド。

アン じゃあ、おやすみなさい。おやすみなさい、マルコムさん。

(ジョン、さつと椅子から立ち上がる。)

ジョン アン、君は暫くいるんだ。パット、君は行つてくれ。

クーパー (急いで。)今は止めて、ジョン。あしたの朝まで待つて。(訳註 この「ジョン」は思ひきつた台詞。)

ジョン 今だ。今でなきゃ駄目なんだ。

(クーパーのために扉を開け、出るよう促す。)

ジョン 二人だけにしてくれ、パット。お願いだ。

(クーパー、静かに去る。ジョン、扉を閉め、アンの方を向く。)

ジョン 運命の女神がわざわざ俺達を会わせてくれた。想像もできない計らいだ。何かこれには意味があるんだ。そつだな、アン。

アン ええ、それは私が言った言葉。

ジョン(かすれ声で。)(ワイルダーには何て言ったんだ。

(アン、何か言おうとする。)

ジョン いや、いい。嘘を嘘で固められるのはもうごめんだ。君が言った台詞を僕が言おう。「ワイルダーさん？あの計画、見事に成功よ。いろいろお力になって戴いてありがとう。十分もかからなかつたわ。わが軍門に下るのに。ほんとおかしいのよ、貴方。ちよつとキスをしただけであの人の手、震えて震えて、私の煙草に火をつけられなかつた。上げるでしょう。本当よ。あの人私の足元にひれ伏したの。これで大丈夫。もつこれからはその気になった時はいつだって、あの人を踏み付けに出来るわ。」

(この時までにはジョン、ゆつくりとアンに近づいて、面と向かつて立つている。アン、しっかりと立つているが、少し聲²えている。)

アン(誠実に。)ジョン、お願い。そんなに怒らないで。そんなにひどいことをしてはいないわ、私。貴方にもう一度どうしても会いたかつたの。会いたくてどうかなつてしまひそうだったの。それに会える方法つて言つたら、これしか考えつかなかつた。

ジョン これしか、ね。そうなんだ。君はこれしか考えつかない、勿論。手紙を書くとか、電話をかけるとか、あそこで最初に会つた時本当の事を話すとか(食堂の方向を指差す。)

そついつたことは思いつかないんだ。君は征服しなきゃ、無条件降伏をかちとらなきゃ気がすまない。それも嘘をついて騙して手に入れば余計いい。満足感もそれだけ大きいとい

う訳さ。

アン それは違う。違うわ、それは。ええ、勿論貴方にお話しすべきだった、ジョン。あの時すぐ話さなきゃいけないかったわ。でも、でも今だって私、少しはプライドが残っているわ。

ジョン そりゃこっちも同じだ、アン。有り難い事にね。こっちも同じなんだ。

(ジョン、アンの両腕に両手をおいて自分の方へ引き寄せる。アンの顔を見つめながら。)

ジョン そうだ、今度は見えてきた。メイキャップだ。そうだ、アン。以前にはなかった小さな皺がここにあるぞ。もうたいして暇はかからない。この顔が崩れてきて、男達を気違いのように恋い焦がれさせる力もなくなってくるのだ。

(この時までにはジョン、両腕を滑らせてアンの咽につけていく。)

アン(静かに。)おやりなさい、どうぞ。

(ジョン、アンを数秒間見下ろす。それから激しくつき倒す。アン、座っていた椅子から転げ落ち、そこらにあったテーブルへ身体をぶつつける。ジョン、フレンチウインドウに進み、引いて開け、走って外へ出る。風のためカーテンが内側にはためく。アン、床から立ち上がって立つ。全く動かない。表情なし。暖炉の上に鏡あり。自分の顔を長い間見つめる。突然振り返り、噁り泣き始める。最初は静かに、だんだん激しく。泣きながら立ち上がってホールの扉に盲滅法に進む。泣き声抑えがたい。クーパー、アンが扉に達するまでに入ってくる。アン、クーパーが道を塞いでいるのを見て部屋に走

り戻る。噁り泣きは続いた俵。クーパー、落ち着いてフレンチウインドウを閉める。アンの方を向く。アンに近づき、片手を肩に置く。)

クーパー どうぞ、私の部屋に、ミシイズ・シャンクランド。ストーブがあります。座り心地のよい椅子もあります。シェリーもあつた筈ですわ。あそこだったら落ち着きます、きつと。誰も来ませんし。

(クーパー、アンを扉の方へ動かし始める。)

クーパー ここはいつ誰が来るか分からないでしょう？

来たら困るわ。ねえ、ミシイズ・シャンクランド。さあ。

(クーパー、扉の方へ導く。)

(暗転)

第三場

(場 食堂。次の朝。ミーチャム、自分の席に座って朝刊のスポーツ欄を、目を近付けて見ている。二人の学生、席について本を読んでいる。他のテーブル 窓際のテーブルとアンのを除いて は食事済んでいる。クーパー広間から入ってくる。)

クーパー(広間からの声。)ええ、ミシイズ・レイルトンベル、必ずその旨お話しします。

(レイルトンベルの呟き声が舞台裏から聞こえる。)

クーパー ええ、全く破廉恥な事ですわ。あつしやる通り、マルコムさんには私から厳しく申し伝えますから……

(クーパー軽い溜息をつけて扉を閉める。)

クーパー(明るく二人の学生に。)お早うございます、ミ

ス・タナー。お早うございます、ストラットンさん。

(二人、モゴモゴと挨拶する。すぐに二人とも本に戻る。)

クーパー お早うございます、ミス・ミーチャム。やっと湿気のない良いお天気になりそうですね。

ミーチャム ニューベリーでも湿気がないかしらね。それが問題よ。ウールドガーデンはからつとした日じゃないと全く走りが悪いの。

クーパー 負けたわね、ミス・ミーチャム、お天気の話でも馬になってしまふのね。

(メイベル登場。)

メイベル マルコムさんが、お部屋にいらつしやらないんです、ミス・クーパー。さっきお茶を片付けに行つて分かつたんですけど、ベッドも使われていない様子です。

クーパー (安心させるように微笑んで。) 分かっているのよ、メイベル。

メイベル ご存じでしたの？

クーパー 勿論あなたには言っておくんです。すっかり忘れてしまつていて。夜中にロンドンに用事ができたの。

メイベル じゃあ朝食には、いらつしやらないんですね。

クーパー ええ、その筈よ。

(二人の学生、広間へ出て行く。)

メイベル 何かあったのね。もう十時、それなのに、まだ新しいお客様は？ まだ降りていらつしやらないんですけれど。

クーパー いいえ、もう降りていらつしやるのよ、メイベル。でも朝食はいらないはず。

メイベル 朝食がいらないんですって？

クーパー ええ、肥ると仕事によくはないの。

メイベル (陰気に。疑わしそうに。) 仕事によくなくて、身体によくないわ。餓えて死んだらおしまいなのに。

(メイベル、台所に入る。)

ミーチャム あの人出て行くんでしょう？ あの新しい人、クーパー ええ、そう。どうしてお分かり？

ミーチャム 「荷物を下に運んで」って頼んでいるのが聞かえたの。とても耐えられないって分かっていたわ。

クーパー (きつとなる。) 耐えられない？ このホテルがですか、ミス・ミーチャム。

ミーチャム いいえ、とんでもない。ここはボンマスいちよ、値段にしては、いつでもそう言ってるの、私。いいえ、

ここの生活のこと。ほら (空席を指差す。) ね。あの人ひとりのタイプじゃないの。

クーパー ひとりのタイプっていうのがあるんですの？

ミス・ミーチャム。ミス・ミーチャム ありますとも。そう簡単にいる訳じゃないのよ、勿論。でも、あなたはそのタイプだわ。

クーパー 私が？ ひとりのタイプ？

ミーチャム そうよ。そりゃ、馬鹿な考えを起こして、誰かに恋しちゃって、結婚したりするかもしれないわ。だけど私の言ってるのは、あなただったらそんなことをしない方が幸せっていうこと。あなたは自分で足りているっていうタイプなの。

クーパー (少し疲れた声。しかし丁寧に。) そう思つて下さつて嬉しいわ、ミス・ミーチャム。なんだか勇気をつけて

下さっているみたい。

ミーチャム それどういふことかしら。(訳註 鋭く言つ。)

クーパー 自分でもはつきりとは分かっていないんですわ。今朝は私、疲れていて・・・ゆつべは殆ど寝ていないんです。

ミーチャム そうね。ひとりタイプって言われて本当は嬉しくないって事ね。多分あなたは態度を決めなければならぬいっていう、抜き差しならない場面に立ったことがまだないのよ。私はもうとっくの昔にそういう場面に会ったの。こんな汚らしいおばあさんになるずっと前。若くて奇麗でお金と地位があつて、求婚者も沢山いた時にね。(思い出すように。)そう、かなりの数だったわ。そのどれも選ばなかった。後悔したことは一度もないわ。一度も私、昔から人と付き合うのが怖かったの、少し。人って複雑でしょう? だから私、死んだ人の方がいいの。やっかいなことは何もないし、嫌になつたらさつさと他の人にすればいいの。テレビのチャンネルを替えるのと同じ。

(ミーチャム、立ち上がる。)

ミーチャム そう、私がいつも言っているのは一人でいるのが本当に幸せな状態っていうこと。勿論その素質がなくなっちゃ駄目だけど。あのメイフェアの、新しい女の人、あの人にはないの、それが。一目で分かるわ。こんなところに二週間もいてご覧なさい。ガス自殺ね。お昼はポークでしたっけ。

クーパー ええ、そうです。

ミーチャム 私、ポークが嫌いな。そうそう、賭けるんだつたらウォールドガーデンよ。馬場の状態さえよければ必

ずはいるわ、この馬。

(ミーチャム退場。一人になってクーパー、ミーチャムの座っていた椅子に疲れてどつかと腰を下ろす。ミーチャムのカップを洗ってコーヒーを注ぐ。すする。疲れ切った頭を胸の中に埋める。疲労困憊。暫く経ってジョン、ゆつくりとホールから登場。辺りを見回した後、クーパーに近づく。)

ジョン(低い声で) パット、ちよつと頼みたいことが・・・(クーパー、目を開けジョンを見上げる。彼と分かるとぱつと立ち上がる。)

クーパー ジョン、貴方、大丈夫?

ジョン 大丈夫だ。

クーパー 何処へ行つていたの?

ジョン 分からない。ほつつき歩いていたらんだ。

クーパー 一晩中?

ジョン いや、屋根のあるところに少しはいた。パット、僕は金があるんだ。ゆうべクラブで一週間分の小切手、全部使い果たして文無しなんだ。

クーパー いくら欲しいの?

ジョン 汽車に乗って何処かへ行って二、三日滞在していただけるだけの金。三、四ポンドかな。頼む、パット。

クーパー そんなことしなくて大丈夫よ、ジョン。あの人出て行くわ。

ジョン 出て行く?

クーパー ええ。

ジョン 今何処にいる。

クーパー 私の部屋。事務室。大丈夫。ここには来ないわ。

(クーパー、ジョンの服に触る。)

クーパー ずぶ濡れになったの？

ジョン うん、多分そうだったんだろう。今は乾いた。

クーパー 座って朝食をおとりなさい。冷たいわ、手。氷のよう。

(クーパー、ベルを鳴らす。)

ジョン 食べるものはいらぬ。お茶だけにしてくれないか。

クーパー わかったわ。座って。ネクタイを真直にして。カラーをおろして。そうそう。それでいいわ。それでちゃんとした。

(ジョンに座らせるよう椅子を引く。ドリン登場。)

ドリン お呼びでしたか。(ジョンを見て。)

あーら、帰って来たの？ こんな時間にまで朝食出ると思ってるの？

クーパー お茶だけ、ドリン、お茶だけでいいの。

ドリン 分かった。お茶だけならオーケーだよ。

(ドリン、台所に退場。)

クーパー あの子は辞めさせないと。(ジョンの方を向く。)

やれやれだわね。貴方のやり方。あんな真夜中に跳びだして。心配したのよ。二人とも。

ジョン 二人とも？

クーパー そう。貴方がとんでもないことをするんじゃないかって。あの警察に電話するっていうのを、私とめたの。

ジョン じゃ、君達は話をしたのか。

クーパー ほとんど一晩中。ちよっとヒステリーぎみになっていて落ち着かせるのに苦労したわ。医者は呼びたくなかつ

たし。

ジョン そうか、バット、あいつは大丈夫だったのか。怪我は？

クーパー 咽のこと？ 大丈夫。

ジョン あいつを突き飛ばしたんだ、慥か。倒れてぶつけたように思った。頭か何か。違ったかな。前の時とこっちゃんに。

クーパー (しつかりと。) 大丈夫。何もなかったの。傷も打ち身も、何も。

ジョン (呟く。) やれやれ、助かった。

(ドリン、紅茶を皿を持って登場。)

ドリン ビスケットを持ってきたわ。好きだもんね。

ジョン 有難う、ドリン。本当に有難う。

ドリン あーら、転んだのね。腕が泥だらけ。

ジョン ええっ？ ああ、そうだ。転んだんだ。今思い出した。暗やみでね、つまずいて。

ドリン 後で渡して。落とすとくから。

(ドリン退場。)

クーパー さつき気がつかなかった。ご免なさい。

ジョン いいんだ。酔っ払って転んだぐらいにしか思わないよ。あいつは、今朝はどうなんだ。

クーパー 気分が悪いの。でも少し収まっているわ。あの薬を飲んでいるの。知ってた？

ジョン 薬？ どんな薬だ。

クーパー 普通の睡眠薬なんだけど通常の三倍ぐらい飲まないで効かないの。それにお昼にも飲むの。

ジョン 何時(いつ)頃からやり始めたんだ。

クーパー 一年前から。話を聞いた限りでは。

ジョン 馬鹿な奴だ。どうしてそんな事をするんだ。

クーパー (肩をすくめて。) じゃあ貴方、飲んだくれるの、
どうしてなの？

(間。)

クーパー そうね、あなた方二人、丁度同じ事をしている
のね。一緒にいれば相手をめっちゃめっちゃにしないと気がすま
ないし、離れていれば自分をめっちゃめっちゃにしないと気がす
まないの。問題だわ、これは。

(間。)

ジョン ゆうべどうして僕に言わなかったんだらう、その
ことを。

クーパー それがあの人らしいところよ、勿論。自分が不
幸だつていうところを貴方には見せられない。だつてどんな
に貴方が必要かを見抜かれてしまう。それはあの人が決して
しないこと・・・何百年何千年経つたつて、それだけはしな
いわ。勿論ここに来た理由だつて本当の事は言いつこない。
私ゆうべだつて、もうそんな事分かつていたのに、悪いこと
をしたわ。ワイルダーなんていう名前を言うんじゃない。
焼き餅なのね、結局。いけなかったわ。

ジョン あいつ何時に発つんだ。

クーパー 貴方のことが心配で残っているだけなの。私ポー
ンマスの病院に、はじめから電話しようと思つていたところな
の。あの人私に頼むものだから。

ジョン なるほど、よしと。このビスケットが終わつたら

何処かへ出て行くか。あいつには大丈夫だからと言つておい
てくれ。それから、あいつが出て行つたら僕に知らせてくれ
ればいい。

クーパー 大丈夫だつていうこと、自分で言つた方がいい
んじゃないかしら。

(間。)

ジョン いや。

クーパー それは貴方の勝手ですけど・・・でも、もし私
が貴方の立場だつたら自分で言つわ。

ジョン (荒々しく。) 僕の立場にいるつてことがどんなこ
とが君に分かるもんか。想像もできない筈だ。

クーパー (静かに。) 想像は出来ると思つ、私には。ああ
本当に疲れた。こんなところで貴方と話なんかしてはいたら
ない。いっばいやらなきゃならない仕事があるの。貴方はこ
こにいるからつて言つてくるわ。

ジョン いや、それは止めてくれ。なあ、パット、あいつ

に何故僕がまた会わなきゃならないんだ。理由を教えてくれ
ないか、一つでいい、たった一つで。

クーパー いいわ。じゃあ一つだけ。でもこんなこと私の
口からわざわざ言う必要はないの、全く。理由はね、貴方が
あの人を愛しているから。そしてあの人貴方を必要として
いるから。

(間。)

ジョン ゆうべ君たち二人の間に何があつたんだい。あ
いづはどうやって君を手なづけたんだ。

クーパー 手なづける。まあまあ、そんなことが出来ると

思ってるの？ 呆れたわね。私の貴方への気持ちは分かっているでしょう？ あの人はそんな事、そぶりにも見せなかった。ひと芝居うつなんてそんなことは。ありの儘のあの人をちゃんと見たわ。あの人について貴方が言っていた事は多分本当ね。慥に虚栄心は強いし、甘やかされている。利己的で人を騙すのを何とも思わない。貴方はあの人を愛しているものだから、それが大きな罪悪のように見える。歪んだ鏡に写しているのね。それを見ると、貴方はついカツとなつて・・・そう、ゆうべのような事をしでかしてしまふ。でも私には普通の人間の、普通の欠点に見えるわ。誰でもが持っているありきたりの欠点に。特に女にね。男にも時々あるけなつてしまふ。だつてあの人、不幸せで、希望はなくなつて、病気で、助けを必要としているんですもの。今まで私があつたどんな人よりもね。さあ、どうしましよ。あの人を呼びましようか？

ジョン いや、止めてくれ、パット。間をとりにもつたりしないでくれ。成り行きに任せよう。あいつはこのままロンドンに帰つて自分の人生を送るんだ。僕もここで余生を送る。波風の立たない余生をね。

クーパー（静かに。）それはいい考えだわ、ジョン。でもその前にちよつと意見が聞きたいわ。貴方のここでの波風の立たない余生つてどういうものかしら。

ジョン うん。しかしまあ、余生には違いないよ。

クーパー そうかしら。余生つて少なくとも生きていなければならぬのよ。貴方の人生、生きていくことになるの？

（ジョン、答えない。）

クーパー ねえ、ジョン。正直に答えて頂戴。そうね、勿論、政治評論の仕事はあるし、クラブに友達もいるわ。でも、それで生きていくことになる？

（間。）

ジョン（やつと。ぶつきら棒に。）それでも生きていくことにするよ。

クーパー（微かな笑い。）有難う。正直な言い方だわ。張り切つて生きている、なんて言われたら困つてしまふ。でも私、努力したのよ。私達が最初始めた頃。もう随分以前になるけど。貴方に生活らしい生活をして貰おうと思つて。私、正直なことを言えば、とても一生懸命やつてみたわ。

ジョン 知つてる。

クーパー だけども間もなく分かつてしまったの。どうやつても駄目だつて。

ジョン 僕を責めないでくれ、パット。よく言うやつさ。「自分の力じゃどうしようもない。」これなんだ。

クーパー 貴方の力じゃどうしようもない？ ええ、まあそうね。（非常に明るく。）考えてみると不幸なことね。貴方二人が出会つたつていうこと。

ジョン うん、そつだ。大きな不幸だ。

クーパー（明るく。）もし会つていなかったら、あの人は百万長者の奥さん。貴方は総理大臣、私は銀行のホブキンズさんと結婚していたわ。そして三人とも幸せだったのに。じゃ、今から私、事務室に帰つて、あの人に貴方がここにいるつて言つわ。その前にファウラーさんに会つて、使わなかつた部

屋のことで少し話をしますから、その間に逃げたかったらお逃げなさい。扉はあそこ。通りはその外。ちょっと行けばクラブ。まだ少し早いけど、貴方なら入れてくれるでしょう。

(広間へ去る。)

クーパー (退場する時に。) ああ、ファウラーさん、お呼びだして済みませんでした。ちょっとお話があつて……

(扉、クーパーの後ろで閉まる。一人残され、ジョン、迷っている様子。まず立ち上がる。次に座る。ドリーン登場。)

ドリーン 終わり？

ジョン もう少し。

ドリーン 諦めが肝心よ。

(他のテーブルを片付ける。アン、広間から登場。ジョン、アンを見ていない。)

ドリーン あら、ミスイズ・シャンクランド。朝食だったら遅すぎよ。ご存じなかったのね。でもコーヒーは少し残ってる。それによかったら紅茶も。それからビスケットだったらあるよ。それでいい？

アン 有難う、ご親切に。じゃあ、コーヒー。

ドリーン オーケー。(ドリーン、台所に退場。)

アン (ジョンのテーブルの傍に座って、訴えるように。)

ジョン。(ジョン見上げる。)

ジョン (静かに。) 自分のテーブルにいた方がいい。あの子がすぐ戻ってくる。

アン ええ、ええ、分かったわ。

(アン。自分のテーブルにつく。ジョン、自分の席の傍。)

アン 貴方のこと死ぬ程心配したわ。

ジョン その必要はなかったよ。僕は大丈夫だ。君の方はどうだ。

アン 私も大丈夫。(間の後。) 私、今日出るの。

ジョン うん。聞いた。

アン もうお邪魔はしないわ。決して。ご免なさいだけを言おうと思つて。貴方に嘘なんかついて。

ジョン いいんだ。有難う、アン。

アン どうして嘘なんかついたのかわからない。貴方が言った理由からじゃないと思つけど。その理由もあつたかもしれないわ。もう自分のことがよく分からなくなつてしまったの。ご免なさい、ジョン。

ジョン いいんだ、そんなこと。

アン 私って嘘つきなの、ひどい嘘つき。小学校のころからそう。自分でも分らないの。どんな簡単なことでも本当のことを言うより嘘を言った方が私には面白かつたの。

(弱々しい微笑み。) 昔私達が喧嘩したの、大抵何時だって私の嘘からだつたわね……覚えてる？

ジョン うん、覚えてる。

(アン、頭を下に向ける。突然涙が落ちる。)

アン ああ、ジョン。私どうなつちやつたのかしら。

(ドリーン、盆を持って登場。アン、素早くドリーンから顔をそらす。ドリーン、まずジョンのテーブルに行く。ビスケットの皿を置く。)

ドリーン もう少しいると思つたんだ。凶星でしょう？

(ドリーン、アンのテーブルにもビスケットを持って行く。

アン、やっと間に合つて涙を拭き終わっている。)

ドリーン はい、ビスケツト、ミスイズ・シャンクランド。
アン 有難つ。

ドリーン コーヒーも、もうすぐね。

(ドリーン退場。何も気づかない。)

アン(再び微笑む。) 見つかるどころだったわ。ご免なさい。今朝は涙もろいわ。

ジョン シャンクランドは君に年いくら出したんだ、正確のところ。

アン 言ったでしょう、七百五十。(ジョンと目が合う。とうとう恥ずかしそうに。)

ジョン それだけあれば幸せなもんじゃないか。

アン もう私 物では幸せにはなれない。いくらあつても。

ジョン ロンドンには人間がいるじゃないか。いい友達はいないかもしれないけど、知り合いなら腐るほどいる。連中と楽しく暮らせるはずだ。

アン ロンドンで暮らすっていうのはここで暮らすより寂しいのよ、ジョン。ここでなら少なくともテーブル越しに話が出るわ。ロンドンでは電話よ。それに大抵の場合、応答なしね。

(間。)

ジョン アン、薬は止めなきゃ駄目だよ。

アン あの人が話したの？

ジョン 薬で何とかしようとしたって無駄だよ。

アン ええ、分かっているんだけど。

ジョン 全部ごみ捨てに捨てるんだ。あれは身体に悪いよ。

アン できないわ。やるうと思つても。それだけ自分が強

くないのね。でも減らすようにする。出来れば。

ジョン やってみるんだ。

アン ええ、やってみる。約束するわ。

(間。)

ジョン なあ、アン。君が僕を必要とすると言う時、君が言っているのは、この僕なのか、それとも僕の愛なんだろうか。もしそれが僕の愛だと言うのなら、それは君の手中にある。君はそれをよく知っているんだ、今では。君の生きている限り、それは保証されているよ。

アン 貴方よ、私が必要なのは。

ジョン でも何故だ。君に対して何ができるっていうんだ、この僕が。

アン ただ一緒にいる。それだけでいいんだわ。だって貴方は私じゃないものだけで出来ている人なの。正直で、真面目で、誠実で、頼り甲斐があつて……(言い止む。微笑もつとする。)

ああ、これ、貴方の美德の目録。退屈だわね……貴方も答えようがないし。ご免なさい。それにあの変なウエイトレスが又入つて来て泣いているのを見られてしまう。

ジョン(ゆっくりと。)

昔はそういう美德があつたかもしれないよ、アン。だけど、今僕にそれがあるかどうか疑わしいな。だから君の必要とするものを僕は満たせないだろう。それからこれははっきりしているんだ。言い難いけど。つまり、君は僕の要求を満たしてはくれないということ。

アン どうして分かるの？

ジョン 経験だよ。

アン この八年で私が変わっていたら？

ジョン 僕の問題としているところは変わりっこないんだ。

アン それでも試してみたい。

ジョン 僕だって試してみたいさ、アン。僕だって。けど、どうせまた失敗さ。

アン どうして言いきれるの、そんな風に。

ジョン どうしてかって言うとな、一人の要求、それは夫々別個だとの害もない。丁度酸素と水素みたいなものさ。だけど二つを試験管に入れてちよつと火花でも飛ばせば、ドカんと爆発するのさ。

アン（肩をすくめて。）それでも試してみたいわ。爆発して死んでもいい。だって世の中には死よりも嫌な事があるもの。ね？（見回して、人のいないテーブルを指差す。）ゆつくりと、じわじわと、人の心をむしばんで行く孤独。恐ろしいわ、ジョン。本当に恐ろしい。（アン、うつ向く。また涙がこぼれる。）私弱虫なの、ひどい弱虫。一人で何か出来たことなんか一度もないの。空襲だって、病気の時だって、手術だって。私一人では駄目だったの。そして今、私は老いて行く。その老いて行くことも一人では駄目なの。

（ジョン、ゆつくりとテーブルから立ち、アンのテーブルに近づく。アン、その時までうつ向いて目にハンカチを当てている。やっと少し落ち着いた時、始めてジョンが自分のテーブルに座っているのに気づく。アン、何も言わずジョンを見る。ジョン、アンの手を握る。）

ジョン（優しく。）アン、分かるだろう？ 僕達はほとんど何の希望もないんだ。

（アン、頷く。ジョンの手を強く握り返す。）

アン そんなに私達、離れ離れなのかしら。

（ドリーン、アンのコーヒーを持って登場。二人、手を離す。）

ドリーン（二人を見て。）ああ、（ジョンに。）あそこのお茶、こっちに持って来ましょうか。

ジョン ああ、頼む。

（ドリーン、運ぶ。アンにコーヒーを置く。）

ジョン 有難う。

ドリーン これからは二人一緒に座るのね。その方がいいなら、それでいいわよ。

ジョン そうしよう。

ドリーン じゃあ、お昼は二人分盛り合わせにして持って来るわ。まあ出来ればの話だけど……

（ドリーン、台所に退場。ジョン、再びアンの手を取る。）

（幕）

銘々のテーブル
七番目のテーブル

テレンス ラティガン 作
能 美 武 功 訳

登場人物

ジョン ストラットン

チャールズ ストラットン

ポロック

ファウラー

パット クーパー
モード レイルトンベル
シビル レイルトンベル
グラデイス マシスン
ミーチャム
メイベル
ドリーン

第一場 広間 お茶の後
第二場 食堂 夕食

第一場

(場 ボーリガード・ホテルの広間。第一幕から約一年半経ったある日。椅子が夏向きにカバーがしてあるほかは、椅子等の配置、変化なし。チャールズ・ストラットン、フランネルのズボンにスポーツシャツ。ソファに座って分厚い医学の論文集を読んでいる。開いているフレンチウインドウからジーン・ストラットン 第一幕のジーン・タナー 乳母車を押して登場。)

ジーン (赤ん坊に 赤ん坊は観客からは見えない。いらつちやい、パパの所へいらつちやい。パパがチュッチてくれるわよ。それからおやちゆみの挨拶と・・・)

(チャールズ、また邪魔が入ったかという顔。)

チャールズ なんだ、もう寝る時間なのか。

ジーン 六時過ぎよ。勉強はどつ?

チャールズ 大幅な遅れだね。次から次に邪魔が入るんだ

からな。ここへやって来たのがそもそも間違いだよ。先回の時で懲りるべきだった。デイヴィッドの別荘にすりゃよかつたよ。

ジーン テムズ川の汚い空気? 赤ちゃんによくないわ。ボーンマスの方がずっといい。(赤ん坊に。)ね、そつでちよ? おチビちゃん。「ママ、ここいいよ。いい空気、いい日差し、赤ちゃん元気に育つ。」って言ってるわ。

チャールズ そんなこと言ってるもんか。そいつが言えるのは「グー」だけじゃないか。僕は少し心配しているんだ。

ジーン 馬鹿なこと言わないで。五ヶ月で何が言えるつていうの。エリオットの詩でも暗唱して貰いたいような言い方ね。

チャールズ 僕はね、その「いらつちやい」式の言葉で話しかけるのは危ないと思ってるんだ。あとになつて知恵遅れの原因になる可能性があるぞ。

ジーン (満足そうに。)馬鹿なこと言わないで。

(この時までにはジーン、ソファのチャールズの隣に座つていて、優しく彼にキスする。チャールズ、少し唐突に抱擁から離れる。)

ジーン ちゃんとキスして頂戴よ。

チャールズ (呟く。)キスするんじゃなくてキスするのは。

(チャールズ、以前よりは念入りにキスする。離れる。)

ジーン もつと。

チャールズ これで終。

ジーン どうして。

チャールズ まだ早すぎ。

ジーン あなたつて急にそつけなくなる時があるの。だから

ら私考えちゃう。どうしてこんなに貴方のこと好きなんだろうって。だだけ好きなんだから仕方がないわ。酷い話。今日だって、午後いっぱい、ずっと貴方の事を考えていたの。どうしてこんなに好きなのかって。変だね。じわじわ、じわじわ、酔が回るみたいに「好き」っていうのが回ってきたの。貴方はどうだったの、結婚する前。もう回っていたの？ それとも好きだって嘘をついていたの？

チャールズ 嘘をついていたんだ。さあ、もう、そいつをおねんねちゃんに連れて行って、僕をおちこちゃんに返してくれよ。そうしないとおいちゃちゃまになれないよ。

(庭から大きな陽気な声がする。)

ポロツク(舞台裏で。) やあ、やあ。ミス・ミーチャム。

ご勉強ですな。相変らず。明日のレースでうまいのがありますか。

ミーチャム(舞台裏で。) そうね・・・

チャールズ ええい、くそつ。少佐の奴だ。ジーン、早く行ってくれ。赤ん坊を見られたらおしまいだ。何時間もあいつの議論につきあわなきゃならなくなる。ポリネシアにおける子供の福祉についてだとか、何だとか、かんだとかにね。

ジーン 分かったわ。(赤ん坊に。) いらっちゃん、それなら。(ジーン、チャールズと目が合う。しっかりと。)

いらっしやい。それなら。ヴィンセント・マイケル・チャールズ。お風呂の時間よ。それから、おやすみの時間。これならいいのね。

ミーチャム(舞台裏で。) レッドロビンがいいわ。これは穴ね。

チャールズ いい。

(ジーンが、乳母車を押してホールに出て行く時チャールズ、ジーンに投げキスを送る。出る時、赤ん坊の泣き声。)

ジーン (出て行く時。) あーら、いけないママね。マイケルちゃんを明るい所から、くらーい所へ連れて行ったりして、いけないママよ。

(ジーンの声小さくなる。チャールズ、本に戻る。)

ポロツク(舞台裏で。) 三時三十分のレッドロビン。よし、覚えとこう。この頃は賭けるにもあまり余裕がなくてね。昔は良かった。馴染みの馬券屋にさつと電話をかけて頼んでおいたもんだが。いい天気ですな、ミス・ミーチャム。

ミーチャム(舞台裏で。) ええ、そうね。

(ポロツク登場。五十半ば。刈り込んだ軍隊式鼻髭。ひどくきちんとした服装。実際、服装でも顔つきでも、これが退役少佐でございといった典型。典型過ぎて本物に見えない程。)

ポロツク やあ、ストラットン君、相変らずやってるな。

チャールズ(お義理でちょっと本から目を上げるだけ。) ええ。

ポロツク よく続くなあ。いや、それだけ続くつてのは信じられんぐらいだ。実に敬服すべき勤勉さだな。

チャールズ ええ、まあ、どうも。

(間。ポロツク座る。)

ポロツク 勿論私だってサンドハーストにいた頃には・・・あ、失礼。これは君の邪魔になるな。

チャールズ(礼儀正しく、本を下ろして。) いいえ、構いません、ポロツク少佐。えーと、サンドハーストにいらした

頃は？

ポロツク いや、何、大体君と同じだったって言おうとしていたんだ。当番あけて、先輩、同輩連が女の子の尻を追っかけに、街へ繰り出している間、私はよく自室に閉じこもったり、図書館へ行ったりして詰め込んだものだ。気遣いのようにね。戦争の歴史 世界的に有名な戦役 クラウゼヴィッツ この類（たぐい）だ。クラウゼヴィッツについてはかなり喋れた時もあったな。

チャールズ ははあ、今は駄目なんですか。

ポロツク 今は駄目だな、残念ながら。昔話 みんな昔話だ。しかしあの頃の猛勉強を後悔はしていない、今でもいや、よくやったよ、サンドハーストでは。

チャールズ じゃあ、成績優秀の表彰組でしたね。

ポロツク いや、それはね・・・しかし、いいところまで行っていたんだ、勿論。かなりの所までね。ただ勉強したからって、後がよかった訳じゃない。まあ、隊長付きにはしてくれたがね、デスクワークを認められて。実を言つと隊長にもなれたんだが、断つちまつたんだ。同僚がドンパチやっている時に何マイルも後方に下がっていい思いをしているっていうのが気になってね。馬鹿な事をしたものさ。少将までは行けたんじゃないかな。我がブラックウオッチ隊じゃ昇進が厳しすぎた。他の隊にすりゃよかつたよ。

チャールズ（明らかに会話を終わらせようと。）（そうですね。

ポロツク また邪魔をしまったな。失礼。さあ勉強を続けてくれたまえ。どうも私はお喋りが過ぎる。これが退役

将校の悪い癖だ、な？

チャールズ そんなことはありません。でももし構わないでしたら、僕はこれをやりますが・・・いっぱいあるんです。片付けなきゃならない事が。

（間。チャールズ、読書が続ける。少佐、立ち上がり、音をたてないよう、必死の努力。抜き足差し足、テーブルに近づき、雑誌を取り、抜き足差し足戻つて来る。チャールズ、その間ずっと少佐の行動を意識している。それが傍目にも分かる。ファウラー、フレンチウインドウから登場。手紙を持っている。）

ファウラー ああ少佐！ 嬉しい手紙が来たんですよ。

ポロツク（唇に指を立ててチャールズを指差し。）（シッ。

（チャールズ諦めて立ち上がり、扉へ進む。）

ポロツク ああ、ストラットン。僕らのせいらしい。すまない。

チャールズ いや、いいんです。普通は部屋での方が集中できるんですから。

ポロツク だけど、赤ん坊がいるんだろっ？ うるさい。

チャールズ ええ、でも、うるさくない赤ん坊ですから。

まだ口がうまく回らないんですよ。

（チャールズ退場。）

ポロツク おお、ファウラー、手紙って誰からだい。昔のいい人からかな。

ファウラー（嬉しそうにくすぐす笑って。）（昔のいい人？

いなかっただすね、そういうのは。そちらの方は颯爽たる少佐殿にお任せです。

ポロツク いや、こう言つては何だが、昔はならしたものだ。隊では私のことをみんなバツコー・ポロツクと呼んだものだ。バツコー、例の歴史上の人物、色事であつた．．．（訳註 バツコーは不明。）しかしこんな事はもう昔話ですな。光陰矢のごとし。エフユー・フユガシス・ポスチューム・ポスチューム。

ファウラー（発音を直して。）エヘウ・フガセス・ポスツィメ・ポスツィメ。ウエリントンでは新しい発音で教えなかつたんですか。

ポロツク いや、旧式でしたな。

ファウラー（ウエリントンには、）何年頃在学で？

ポロツク えーと、慥か一九一八年に入学して．．．

ファウラー もうその頃には新しい発音だつた筈ですが。古典の主任教授がウエリントン出で、彼がはつきりこう言つたのを覚えているんですがね．．．

ポロツク じゃあ、そうなんでしょう。私が忘れていただけですな。何分得意でなかつたですからな、ギリシヤ語は。

ファウラー（キョツとする。）ラテン語です。ホラチウス。

ポロツク ホラチウス。そうそう。なんて馬鹿なんだ、俺は。（明らかに話題を変えて。）さてと、どなたからの手紙でしたかな。

ファウラー 昔うちにいた学生で、もう十年以上も音沙汰なかつたんです。優秀だつたなあ、あいつは。その後も順調でしてね、私がここにいるってどうして分かつたのかな。便りしてくれるなんて思いもかけませんでしたね。

ポロツク 画家になつた教え子がいましたな。あれはどう

なりました。

ファウラー 時々新聞で見ますよ、まだ。でも個人的な連絡は今あまりないんです。残念ながら。そう、ちよつと疎遠になつてしまいました。

（クーパー、小脇に新聞を抱えて登場。）

クーパー ああ、ここにいらつしやいましたか、少佐。お捜しのウエストハンブシャー週間ニュース、手にはいりましてわ。

ポロツク（熱心に。）これは有り難い、ミス・クーパー。恩に着ます。

クーパー（新聞を手渡しながら。）三つ目の売店にやつたあつたんですよ。ジョーに行つてもらつたんですけど。

ポロツク いや、有難う。

クーパー 何か事件でも？

ポロツク いや、その、ちよつと見てみたくて．．．今まで一度も．．．その．．．見たことがないんです、この地方紙つていうやつを．．．ここにもつ．．．その．．．四年もいるつていうのに。

クーパー 無理ありませんわ。それにはたいした事が載つていた例（ためし）がないんですもの。せいぜいが駐車違反か牛の品評会。

（ポロツク、回れ右して、新聞を開く。）

ポロツク いずれにせよ、どうも有難う。

ファウラー ミス・クーパー。私に手紙が来たんですよ。もう十年以上も会つていない、手紙も貰つたことのない奴なんですがね．．．

クーパー（明るく。）あら、それはよかったわ。

ファウラー 返事を出してここに、三日来ないかって言つてやるつもりなんです。勿論たいして来たいとは思わないでしょうけど・・・でも、ひょっとして来るような時には・・・あの部屋、空いてますか？

クーパー 今は駄目ですわ。ファウラーさん。飛び込みのお客様が多いんですの。でも九月の終になれば・・・

ファウラー わかりました。じゃあその頃に、と言つてやりましょう。

（二人のこの会話の間、ポロック、二人の見えない所で新聞を次々と捲っている。突然ある記事が目止る。新聞を元に畳み直す。その時紙が鋭い音を立てる。ファウラー、ポロックを見る。）

ファウラー アラメインでは、高地部隊にいらしたつていうお話でしたね、慥か、少佐。

（すぐに返事が返つてこない。ポロック、目を上げるとその目は虚ろ。一点を見つめている。）

ポロック え？ いや違います。高地部隊じゃありません。

ファウラー そうでしたか？ 高地部隊に所属、と思つていましたか・・・

ポロック（ほとんど怒鳴るように。）そんな事を言つた覚えはありません！

ファウラー いや、ただ、この私の昔の生徒が・・・名前がマクレオド・ジェイムズ・カーリー・・・さてよ、ジョンだったかな・・・あいつは何時でもカーリーと呼ばれていたの、今名前が不確かなんですが・・・この手紙に書いてあ

るんです、高地部隊に所属しているって。ひょっとして知つておられるんじゃないかと・・・

ポロック マクレオド？ いや、知らないな。

ファウラー それは勿論知ってるっていう方が珍しいからいの話に決まっていますが・・・でもまるで可能性がない訳じゃありませんから・・・

（ファウラー、扉へ進む。この時までにクーパー、クッションを直したり、ゴミを取ったりしている。ポロック座る。新聞を握つた儘、空間をじつと見つめている。）

ファウラー（独り言。）カーリー・マクレオド。いつかギリシャ語で落第点を取つた事があつたっけ。

（ファウラー、くすくす笑いながら退場。ポロック、再び新聞を見る。クーパー、クッションの位置など直し終わつて立ち上がる。と、ポロック、なにげなく新聞を眺めている振りをする。）

ポロック 確かにつまらない。ご忠告の通り。

クーパー 何のお話ですか。

ポロック この新聞です。どうせあんまり読まれちゃいなんでしょつな。

クーパー この地方の人達だけですわ、多分。お百姓、不動産屋・・・そういつた人達ね。

ポロック この人達で読んでいるのを見たことがありますせんが・・・どうですか。

クーパー いいえ、いらっしやるわ。ミスィズ・レイルトンベル、あの方每週。

ポロック え？ 何のために読むんだろつ。

クーパー 分かりません。何でも知っておきたいっていう人ですから。この世で起きる事は何でも。この片田舎のウエストハンブシャーで起きる事でも逃したくはないんだわ。それと、そのための週四ペンスぐらいなら出せるのね、あの人。

ポロツク（陽気に笑って。）それはそうだろうな。だけど変だな。あの人がこの新聞を読んでいるのを見たことがない。

クーパー ええ、それはそう。全然読まないものだって取ること取る、という人ですもの。そのテーブルに重ねてある新聞、大抵はあの人のも・・・

ポロツク そうそう。そう言えば。じゃあ、今朝のこの新聞だって、もうあの人に届いている？

クーパー ええ、きつと。

ポロツク なあんだ、馬鹿な事をした。四ペンスの無駄使いか。あの人を見せて貰えたんだ。知っていいや。

（ポロツク、陽気に笑う。クーパー、礼儀正しく笑い、片付けを終え、扉へ進む。）

クーパー ウェニソンはお嫌いでしたわね、ポロツク少佐。ですからお昼はチヨップを特別に用意させました。このこと、他の人には伏せておいて下さいね。

ポロツク 勿論、勿論。有難う、ミスクーパー。

（クーパー退場。ポロツク、素早く新聞を広げ、暫く見つめる。熱心に読む。それから急に二頁分引き千切り、丸めてポケットに突っ込む。次にテーブルに行き必死になって捜す。ウエストハンブシャー週間新聞を見つめる。引き千切るべき頁を捜している時に、レイルトンベル、ホールから登場。その後ろにシビル登場。おどおどして活気なし。三十代。

眼鏡を掛けている。服装みずばらしく、化粧なし。）

レイルトンベル（部屋に入って来ながら。）そういう事が言いたかったの、シビル。じゃはつきりそう言わなくちゃ駄目じゃないの。もう少し言い方を考えなくちゃ。でないと分からないでしょう？ あら、今日は、ポロツク少佐。

ポロツク 今日は、ミシイズ・レイルトンベル。（陽気にシビルに。）やあ、ミス・アール・ビー。

（ポロツク、新聞を掴んでいる。隠す事も出来ず、もとの場所に置く暇もなかったのである。レイルトンベルがそれを目にして知るのを知る。）

ポロツク いや、失礼。ちよつとこのウエストハンブシャー・ニユースを眺めていた所なんです。貴方のでしたな、これは。ちよつと貸して戴けませんか。見たい記事があるんです。

レイルトンベル いいですわ、少佐。ただ、必ずお返し下さいね。

ポロツク 勿論。

（ポロツク、扉へ進む。その時までにレイルトンベル、自分の席に進んでいて、さっきポロツクの落としたウエストハンブシャー・ニユースを床から拾い上げている。）

レイルトンベル あら、これは？ 同じウエストハンブシャー・ニユースだわ。

ポロツク（驚きを装って。）え？ ウエストハンブシャー・ニユースですか？

レイルトンベル ええ。
ポロツク これは驚いた。

レイルトンベル 床の上に、この辺にあったわ。

ポロツク 別に頼んだ人がいるのかな。

レイルトンベル こちらの方を持って行って下さらない？
私は私の新聞を戴きたいわ。

ポロツク（それもどうかと思う、という気で。）その新聞の持ち主が困りはしないかな。

レイルトンベル どうせここに落ちていたんですわ。読み終わったものでしょう、きつと。お差しつかえなければ、私の新聞を戴きます、ポロツク少佐。

ポロツク（敗北を認めて。）オーケー。じゃあ元に戻して置きます。

（元に戻す。レイルトンベルから自分の新聞を受け取る。）
ポロツク さてと、ちよつと外をぶらついて来るか。

シビル（おずおずと。）あー、ポロツク少佐。私、こゝ緒出来せんかしら。私も散歩はまだなんですの、今日は。

ポロツク（困つて。）お申し出は有り難いんですが、その、ミス・アール・ビー。いや、本当に。しかしちよつと・・・途中から友人宅に、寄るつもりなので・・・それが・・・ちよつと・・・

シビル（ポロツクよりもつと恥ずかしそうに。）いいえ、いいえ。いいんです。ご免なさい。

ポロツク いやいや、謝るのはこっちの方です。じゃあ、バアイ。夕食の時また。（ポロツク退場。）

レイルトンベル「バアイ」だなんて。使つべき言葉じゃないわ。品のない。でもあの人自身、品のない人なんだから・・・

シビル あら、ママ、そんなことは・・・あの方随分立派な隊にいらしたのよ。

レイルトンベル 近衛部隊にいたつて下品な人は下品なのよ、シビル。（優しく。）ねえ、シビル。お前お嫌だらうけど、私の言う事を少し聴いて頂戴。年寄の繰り事つてお前、思うだらうけど。

シビル（諦めて。）はい。

レイルトンベル あの人のあんなごまかしを、その儘聞き流すのはあんまり賢明なやり方じゃないと思うのよ。

シビル あれはごまかしじゃないわ、ママ。あの人、本当にお友達に会いに・・・

（レイルトンベル、分かっているというように、また同情するよゝに微笑み、頭を少し横に振る。）

シビル 私分かつてるの。だつてあの人とよく散歩に出るんですもの。

レイルトンベル 知っています。それに知っているのは私だけじゃないわ。ここの人は大抵それに気がついているのよ。

（間。シビル、母親を見つめる。）

シビル（やつと。）まさか、まさか。そんな事を・・・

（シビル、飛び上がり、両手で急に頬を抑える。）

シビル 酷い、酷い。酷いわ、酷いわ。
レイルトンベル（鋭く。）静かになさい。またいつもの発作がおきますよ。さあ。

シビル 大丈夫、ママ。もう発作はおこらない。ただ、あんまり酷い。そんな事を考えるなんて、本当に酷い。こういう話が嫌いな、私。こつという話、考えるだけで恐ろしいの。

レイルトンベル（なだめるように。）分かっています、シビル。でもその方面の話つて人生には必ずあるものなの。だ

から他人に間違った印象を与えないように、いつも気をつけていなければいけないの。少し収まった？

シビル ええ、ママ。

レイルトンベル 良かったわ。こんなことで気分が動揺しないようにしなくちゃ。分かる？

シビル あの人と散歩するのは、話が面白いからなの。聞いていると楽しいの。ロンドンの話、戦争の話、軍隊の話……あの人いろんなことを知っていて……私の方は知らないものだから……

レイルトンベル それどういふこと、シビル。何が言いたいの。

シビル 私ただ……（抗弁するのを止める。）ご免なさい。

レイルトンベル（非情に、狙った獲物はのがさない勢い。）
勿論お前には人生の楽しみ……社交会でのダンス、カクテルパーティ。そういった事が欠けているのは分かっています。お前の年頃の上流の娘達ならそういう楽しみが確かにあります。私だってお前にそれを経験させてやりたいのは山々なのよ。余裕さえあれば……私、これでもせいっぱいやっているの。それは分かかって頂戴。

シビル 分かっています、ママ。

レイルトンベル 去年はローマ、その前は北欧へ船の旅……シビル 分かっている、ママ、よく分かっているわ。私、有り難いって思っているの。本当に、ただ、（言い止める。）
レイルトンベル（優しく頷いて。）ただ……何？

シビル 私、自分で何か出来ないかと思って。だってもう

私、三十三なの……

レイルトンベル まあまあ。この話は何度もした筈よ。どこへ勤めたってお前は、三週間と、もった事がないじゃないの。ジョーンズ、アード、ジョーンズを覚えてる？

シビル あの時は地下室で働かなきゃならなかったからだよ。私、地下室だと息が詰まって気が遠くなってくるの。でも何か出来る事がある筈だよ。

レイルトンベル（シビルの手を軽く叩きながら。）あなたの身体はそんなに強くないの。それをよく頭に入れておかないくつちゃね。神経が人より過敏に出来ているの。

シビル あの発作のこと？ 此頃ずっとないわ、私。

レイルトンベル 確かにそうね。このところお利口さんよ。よく気をつけてくれるわ、本当に。でもヒステリーの発作がおきないからといって、じゃ仕事につけるほど丈夫かつていうと、それは違うでしょう？（この議論にきっぱり結論を下して。）あの新聞を取って頂戴。

シビル どの新聞？

レイルトンベル ウェストハンブシャー。何に興味があったんだろう、あの少佐。

（シビル、新聞を渡す。レイルトンベル、ポケットを探る。）
レイルトンベル あらまあ。私ってなんてお馬鹿さん。眼鏡と本を置いて来てしまったわ。ラグーサ・ロードのバスの待合所に。盗まれていなければいいけど。まだあると思う。

ねえお前、分かるだろう？ 私いつだってお前が頼りなのよ。今日のお昼、お前は頭痛で私と一緒にじゃなかった。そしたら

たちまち忘れ物。

シビル 私行つて来ますわ。

レイルトンベル あら悪いわね。有り難いわ。私のためにこんな事やらせるのは本当に気の毒なんだけど、私今、足が疲れて。年をとると駄目ね。海が見える待合所の一番はじなの。

シビル 二人でよく座る所でしよう？ 分かってるわ。

(シビル退場。レイルトンベル。新聞を開き、目を非常に近付けて見る。過去の経験から、面白い部分は分かっている様子。突然新聞を動かしていくのを止める。観客は彼女の顔が見えない。しかし読むにつれて新聞が震えてくるのが分かる。マシスン登場。)

マシスン あら、モード、もうそろそろニュース番組の時間よ。

レイルトンベル (緊張した声。) グラディス、あなた眼鏡ある？

マシスン あると思うけど。(ポケットを探る。) ええ、あったわ。

レイルトンベル この所、私に読んで下さらない？

(新聞を渡し、指差す。)

マシスン (底意あることに気づかず。) どこ？ タンクローリーの運転手、免許証を失う？

レイルトンベル いいえ、退役軍人御用。

マシスン (明るく。) あら。(読む。)
「退役軍人御用、映画館での破廉恥行為」(見上げて。)
映画館で？ まあ・・・
あなた本当にこれが聴きたいの？
モード。

レイルトンベル (陰気に。) ええ、そう。続けて。

マシスン (諦めて読む。)
「先週の木曜日、ポーンマス祭の始まる前、デイヴィッド・アンガス・ポロック、五十五歳、住所(マシスン、激しく反応する。)
ポーリガードホテル、モーガンクレセント、は・・・」
(熱にうかされたような囁き声。)
ポロック少佐よ、まあ。

レイルトンベル 続けて。

マシスン (読む。)
「(ポロックは)シネマ・ポーンマスにおいて、いかがわしき行為のかどにより訴えられる。」「まあ、まあ。」「訴えたのは、オズボーン夫人、四十三歳(息を切らして。)
住所、ストウツトランド通り、四」
あの人酔っていたのよ。

レイルトンベル 酒は飲まないわ、あの人。

マシスン あの晩一晩だけ・・・

レイルトンベル いいえ。続けて。

マシスン 「証人、オズボーン夫人によると、ポロックは彼女の隣の席に座るや、夫人の腕に執拗に触り、その後さらに大胆な行為に移ろうとした。夫人はここで席を立ち、案内嬢に事情を話した。もう一人の証人フランクリン警部によると、シネマ ポーンマスの経営者から電話があり、早速二、三人の警察官を派遣 午後三時五十三分より七時十分まで、ポロックを見張らせた。この間ポロックは五度以上席を替え、その度毎に女性の横に座った。警部の証言によると、慥かに最初の女性以外には訴える者はいなかったが、こういう場合それは珍しいことではないと。映画館を出る時ポロックは逮捕された。罪状を述べ、注意を与えると、ポロックは次の様に述べた。」「諸君は恐ろしい誤りを犯した。人違いだ。ここに来

たのはたった三十分前なのだ。私はスコットランドガードの少佐なんだぞ。」後になつて彼は罪状を認めた。ポロツクの弁護人、ウイリアム・クラウザーは、ポロツクに代わつて次のように述べた。ポロツクは一時的に錯乱状態に陥つた。このことを遺憾に思つており、また恥じている。以後決してこのような馬鹿げた不穩当な行動はとらないよう氣をつける。弁護人はまた、彼の傷のない過去の経歴も考慮に入れて欲しいと要請した。ポロツクは一九二五年入隊、一九三九年に口イアル・アーミー・サービス・コープに少尉となつた。戦時中はオークニー島の輜重部隊において責任ある地位にあり、一九四六年中尉の位で引退した。ポロツクは実刑を免れた。裁判長は判決にあたり、次のように述べた。「君の行為は恥ずべきものである。しかしどうやらこれが君の初めての犯罪行為であるので、寛大な処置を取る事に決めた。」被告は十二箇月の謹慎となつた。

(マシスン、新聞を下げる。心の底から困つて動揺している。)

マシスン まあ、なんていう事でしょう。まあ。
レイルトンベル(完全に自分を抑えているが、興奮している。)

木曜日、じゃあ水曜日ね、これがあつたの、きつと。覚えてる? あの人、水曜日は夕食を取らなかつたわ。
マシスン そう? そうそう。そつだつたわ。まあいやらしい。しつこくですつて。まあ嫌なこと。

レイルトンベル あの木曜日、あの人ひどくいらいらして、沈んでいたわ。思い出すわ。それから金曜日になつて、また急に明るくなつた。勿論この新聞を読んでこれで無罪放免になつたと思つたのね。運が良かった。この新聞を毎週読ん

でいて。

マシスン 運が良かった? モード。良かったのかしら。
レイルトンベル 勿論良かったんじゃない。そうでなかつたら知らない儘になつていたのよ。

マシスン その方が良かったんじゃない?

レイルトンベル グラデイス、あなた何を言つてるの?

マシスン 私、分からないわ。もう何が何だか分からない。頭が変になつて・・・そうね、知らない方が良かったなんて事はないわね。こういうことは知つておかなくちゃね。でも時々どうして知る必要があるんだらうつて思うこともあるわ。

レイルトンベル じゃあ言いますけど、私達のすぐ傍に、嘘つきの詐欺師がうるうるしていて、全然疑われもせず自由にしている、それを放つておけばいいつて言つ。そんな事をさせておいたら、そのうち恐ろしい大犯罪が起きるかもしれないよ。

マシスン ええ、でもあの人ここにもう四年もうるうるしていて、それで大犯罪なんか起こらなかつたわ。(軽い溜息)

私達、もう年寄のおばあさんなのね。
レイルトンベル(冷たく。) 私には娘があるのよ、グラデイス。

マシスン そうそう。かわいそうなシビル、あの人とあんなに仲良くしてたのに・・・

レイルトンベル そう。

マシスン(ちよつと苦しそつに考えた後。)

ねえ、モード、勿論これは私の言うことじゃないんだけど、それにあなた、母親として子供を守つてやる義務はあるわ。でも・・・でも

ね、シビルって変わっているでしょう？ 興奮し易いし、はにかみやだし・・・それにいろんな点でまだ大人じゃないわ、あの子・・・

レイルトンベル 何が言いたいの、グラデイス、はっきりしてよ。

マシスン ええ、はっきり言うわ。あなた、この事をシビルに話しちゃ駄目よ。

レイルトンベル 話しちゃ駄目？

マシスン ええ、全部は。細かい事は。あの人が破廉恥漢だった、っていうくらいはいいわ。でもモード、あの映画館の話はいけないわ。(突然あることを思いついて、当惑して。) まあ、私、これからあの人にどんな顔をして会ったらいいのかしら。

レイルトンベル 会う必要なんかないのよ。(この時まで椅子から立ち上がっている。自分のこれからの行動に重みをつけるためである。) ミス・クーパーに今会って来るわ、私。そしてあの人に、今日の夕食までに出て行って貰うよう要求するわ。

マシスン そんなことまでしなくてもいいんじゃない？

レイルトンベル なんて事を言うの。今日あなた、どうかしているわね。勿論要求するわ。

マシスン でもあなた、あのミス・クーパーっていう人を知っているでしょう？ 自分の意見がある人よ、あの人。それに頑固になる時があるわ。賛成しないんじゃないかしら。

レイルトンベル 勿論賛成するわよ。私達みんなが言えば仕方がない筈よ。

マシスン でも、みんなじゃないわ。まだ私達二人だけよ。他の人と相談してからじゃない？(突然この言葉の意味を考えて。) あら大変。そうしたら、みんなにこの話をしなくちゃいけないわ。

レイルトンベル(嬉しそうに。) それはいい考えだわ、グラデイス。ファウラーさんはどこ？

マシスン 自分のお部屋ね、きつと。

レイルトンベル あの若い人達は？ 入れましようか。そうね、あの人達、もう長期滞在組に入れていいわね。そうだと、入れましよう。

マシスン 厭だわ、陰口をたたかなくちゃならないのね。

レイルトンベル 陰口？(大仰に新聞を指差して。) 陰口じゃないの。もう世界中に知れ渡っているのよ。

マシスン でも正確に言えばウエスト・ハンブシャーにだけだわ。⁴⁸

レイルトンベル ぐずぐず言わないの、グラデイス。(フレンチウインドウを指差して。) ミス・ミーチャムは庭ね。でもあの人には話さなくていいんじゃないかしら。変わって人。何を言いだすか分かりはしない。それに日に日に変わり者の度が強くなってるわ。あ、シビルだわ。行ってみんなを呼んで来て頂戴。私はシビルに言っただけで聞かせなくちゃ。

マシスン モード、まさか・・・
(シビル登場)

マシスン 私がさっき言ったこと、忘れないでね。

レイルトンベル 分かっているわ。大丈夫。さあ、行って来て。

(マシスン退場)

レイルトンベル(シビルに。)有難う。見つけてくれたのね。

(シビルから本と眼鏡を受け取る。間)

レイルトンベル(やっと。)ねえ、シビル。あなた部屋に戻りなさい。その方がいいわ。

シビル どうして、ママ。

レイルトンベル 長期滞在の客だけで集まって話をするの。たった今、緊急の事態が起こって、そのことでみんな集まるの。

シビル まあ、話合い？ ドキドキするわ。私もいい？
だって私も、考えてみれば長期滞在の客だわ。

レイルトンベル わかっているわ。でも話し合う事が事ですもの。あなたには不向きなの。

シビル どうして、ママ。何の事なの？

レイルトンベル まあ、お前って何て聞きたがりやなの。分かったわ。じゃあこれだけ話しましょう。それ以上は駄目よ。私達が話すのはミス・クーパーに言っただけ少佐を

このホテルから出て行って貰って二度と足を踏み入れないようにして貰おうってことなの。

シビル(茫然として。)何ですって？ 分からないわ。何故なの、ママ。(レイルトンベル答えない。)ねえ、ママ教えて。何故なの。

レイルトンベル 教えられないわ、シビル。それこそ気が動転してしまうもの。

シビル でもママ、私どうしても知らなくっちゃ。知って

おかなくちゃいけないわ。あの人が何をやったのか。

レイルトンベル(少し躊躇うだけで。)お前本当に私に言えっというのね。

シビル ええ、ママ。

レイルトンベル(溜息をついて。)それなら分かったわ。これ以上隠しておく事はできないって言うことね。

(素早い動作で新聞をシビルに渡す。)

レイルトンベル これをお読みなさい。真ん中の欄、上から二番目の記事、「退職将校御用」ってところ。

(シビル読む。レイルトンベル、シビルを見る。突然シビル座る。目は見つめているがぼんやりとしている。マシスン登場。すぐにシビルに気づく。)

マシスン(ショックを受けて。)モード、あなた、酷い事を・・・

レイルトンベル 出来るだけの事はやったわ、グラディス。でもこの子がどうしてもって言い張るもんだから。

(保護者の顔で、娘の椅子に上から屈み込む。)

レイルトンベル ご免なさい、シビル。お前には驚きだったろうね。でも、私達だってそうだったのよ。分かるでしょう？ お前大丈夫？

(シビル、眼鏡を外す。新聞を小さく畳んで椅子の腕に置く。返事をしない。)

レイルトンベル(少し前より鋭く。)大丈夫なの、お前？

シビル(殆ど聞こえない。)ええ、ママ。

(ジーン登場。迷惑そうな様子。)

ジーン 何ですの、ミスイズ・レイルトンベル。私ちよっ

としか、いられませんわ。子供をほったらかしにして来ているんです。

レイルトンベル 長くはお引き止め致しません。お約束しますわ。どうぞお座りになって。(シビルの方を向き、鋭く)シビル、お前、何をやっているの。

(チャールズ登場)

(レイルトンベル、シビルの眼鏡を手に取る。)

レイルトンベル ほら、眼鏡を壊しちゃって。

シビル(呟く。)馬鹿な事をしたわ。

チャールズ あらあら、手を切っちゃってるよ。

シビル 切ってないわ。

チャールズ 切っている。見せて。

(プロの手付きで、硬直している手を取り、調べる。)

チャールズ たいした事はない。ガラスの破片も刺さっていない。さあこれを、きれいですから。

(清潔なハンカチを胸ポケットから取りだし、手に結ぶ。)

チャールズ 後で消毒して薬をつけておきましょう。

(この時までにファウラー、登場している。)

レイルトンベル ああファウラーさん。これで揃いましたね。どうぞお座りになって。すぐ始まります。若いお二人さんが、お急ぎのようですから。残念ながらこれは皆さんにとつて非常に悪いニュースと申し上げねばなりません。

チャールズ またボイラーが故障ですか。

レイルトンベル いいえ、そんなつまらない事であったらよいのにも思いますわ。

チャールズ 冷たい、茶色の水で髭を剃るつてのが、つま

らない事とは思えませんがね。

レイルトンベル 冗談はお止めになって、ストラットンさん。

ファウラー(心配そうに。)また値上げですか。

レイルトンベル いいえ、このニュースはそれよりもっと重大です。

ファウラー 値上げより重大な事、そいつは想像つかない。

レイルトンベル これからお話する事がそれにあたりますわ。

チャールズ ねえ、ミシズ・レイルトンベル、クイズをやっているんじゃないんですよ。さつさと話したらどうなんですか。

レイルトンベル(怒って。)どう切り出したらいいか困っているんです。それぐらい厭な話なんです。だから躊躇っているんじゃないか。でももし皆さんが望みなら、言葉も選ばず、ズバリとお話ししましょう。(芝居がかった間の後。)ポロック少佐・・・この人は少佐でも何でもなく兵隊上りの中尉にすぎませんが・・・

チャールズ(興奮して。)そうか、やっぱりそうだったのか。僕には分かっていた。あいつの陸軍士官学校の話は臭いっ

ていつも言ってたんだ。なあ、ジーン。

ジーン そうね。でも最初に言ったのは私よ。ほら、あのナブキンについてあの人が冗談を言った時・・・

ファウラー(急いで割って入って。)私も怪しいと思って

いたんです。パブリック スクールの教育を受けたという、その点ですがね。今日ですよ、今日。ホラチウスの引用に、

考えられない間違いをやったんです、あの人。ひどい間違いを・・・

レイルトンベル（声を高めて。）「ちょっと皆さん、ちょっと待って。ここはまだ出だしです。これからが本論。もっと恐ろしい、もっとぞつとすることが控えています。」

（この言葉で静かになる。再び芝居がかった間の後。）

レイルトンベル 彼は逮捕されて有罪と宣告されたのです。

マシスン 宣告まで行っていないわ。

レイルトンベル お願ひ、グラディス。どっちでも、たいした違いはないでしょう。「罪を糾弾された。」これならいいの？ とにかくあの人ポーンマス シネマで、少なくとも六人の女性にいかがわしい行為をしかけたのです。

（あつけに取られた沈黙あり。）

チャールズ（やつと。）「驚いたな。なかなかやるもんだ。」

マシスン モード、あなたの言い方正しくないわ。六人にいかがわしい行為をしたかどうかは分からないでしょう。確かに一人にはしたわ。その人は受付嬢にそれを言いに来たんですから。でも、私に言わせれば、この人だって少し変だわ。どうして少佐にその場で、「そんなことをなさるのは止めて下さい。」って言わなかったんでしょう。私だったらそうするわ。他の五人については何にも分かっていないのよ。少佐がその人達に何をしたか、それは全く分かってはいないの。

レイルトンベル 勿論いかがわしい行為をしたに決まってるわ。あの人自身が、あの映画館に行ったのはそのためだったって認めているじゃない。五度も席を変えているのよ。それに必ず女の人の隣の席に。

チャールズ すると五人じゃなくて十人だ。両方の肘を使えばいいんだ。

ジーン 最初の人を入れると十一人、いや、十二人かもしれないわ。

レイルトンベル そんな瑣末な事を言っている場合ではありませぬ。この話の要点は、少佐が・・・いや、少佐と称していたこの人物が、いかがわしい行為をしたかどで、警察に訴えられたという点です。私の質問はここで、私達ホテルの長期滞在客はこれに対していかなる行動をとるべきか、という事です。

ファウラー で、あなたの提案は？ ミシイズ・レイルトンベル。

レイルトンベル 私の提案は、ミス・クーパーにこのことを話して、あの人にこのホテルを出て行って貰うよう要請する、ということですね。

チャールズ そいつは反対だ。

レイルトンベル 賛成なさらない？

チャールズ 賛成しません。いやどうか、この事を軽く考えていると思わないで下さい、ミシイズ・レイルトンベル。彼のやったことは、いやもし彼がやっていたら話ですが、私にとつて汚らわしくて、吐き気を催す行為です。私は昔から性的表現において、こそこそしているつてやつがひどく嫌いなんです。ですから心情的には、ミシイズ・レイルトンベル、あなたの味方です。しかし筋を通して戴くとなれば賛成する訳にはいきませぬ。

レイルトンベル（遮って。）「ちょっと、ストラットンさん、

あそこへお立ちになってお話し下さい。ご議論、ゆつくりお聞きしますね。

チャールズ いや、ここでいいです。どうも。議論といつてもたいしたもんじゃありません。少佐の行為を私が嫌うこと、それに筋が通っていないという話をしていたところでした。筋が通らない。(つまり、私が彼の行為を嫌う正当な理由がないという事です。)多分これは、私が彼のことを理解出来ないのが原因なんでしょう。私の求愛行為は、彼の方には分かるでしょう。彼の求愛行為は私には理解できません。これが分かりさえすれば私には偏見がないことになり、彼を裁く権利があるでしょうが、分からないのです。ですからこの理解の方向は一方通行。即ち私には偏見がある。つまり私は、嫌いとか好きとかいう基準では彼を裁くことはできない。従って、残った部分は、単純なキリスト教的倫理、即ち、「他人に害を及ぼしたか」に照らして裁くだけです。で、自分自身に訊いてみます。「この男は一体何をやったのか。」慥かある婦人の腕を少し触った。婦人は案内嬢に訴えたのですからね。これは確かでしょう。訴えた動機に関しては全く不可解。この点はレイディ・マシスンと私は同意見です。ですから触ったというこの事、これが一つ。それからもう一つ、自分の過去について我々に嘘をついた事、これも考えてみれば涙をそそるようなものです。第一我々だって時には多少なりともやっている事ですからね。・・・とにかく嘘をついた事。この二つだけです。私はこれが彼をこのホテルからつまみだして路頭に迷わせる十分な理由になるとも思えませんね。

ジーン(熱をこめて。)呆れた。私は反対よ。私もこそこそしたこのやり方、だいつ嫌い。これは貴方と同じ。それからこのだいつ嫌いと思うのは正しいと思っている。ここは貴方と違う。私、厭なの。ちつとも偏見だと思わない。こんな風な事をする人、民衆の敵よ。どんな目にあつたって当然じゃない。

チャールズ こんな事でそんなにかつかするなんて、何かあやしいぞ。精神分析にかかると必要があるな。

ジーン 何を言ってるの。私の方こそ筋が通っているわ。あの子がこの次・・・

チャールズ(うんざりして。)そうそう、あの赤ん坊が二十年経って映画館でポロック少佐の隣に座ってみろって言うんだらう?

ジーン そうよ。(チャールズ笑う。)笑いごとじゃないわ。貴方どう思ってる? もし・・・

チャールズ もしあの子が肘をうまく使ってあいつの急所に一撃食らわせなかつたら、そりゃ恥ずかしく思うね。

ジーン 貴方ってなんて馬鹿な話を・・・

レイルトンベル ちょっとお静かに。ここはお二人の個人的な議論を展開する場ではありません。ストラットンさん、今のお話ですと、この件に関していかなる行動も取るべきではないとお考えのようですね。(チャールズ頷く。)全く何もですね。(チャールズ頷く。)抗議の表明もですね。

チャールズ 夕食に非難の一瞥を与える。これどまりです。レイルトンベル(嫌悪の表情を浮かべる。次にジーンの方

を振り向く。あなたの方は、私がミス・クーパーに掛け合うことに賛成なさるんですね。

ジーン（しつかりと。）ええ。

チャールズ（ジーンに囁く。）焚書坑儒か。

ジーン（かっとなって。）これが焚書坑儒と何の関係があるって言うの。

チャールズ 焚書そのものじゃないか。

レイルトンベル（命令口調で。）静かにして下さい。（ファウラーに向かって。）ファウラーさん、あなたのご意見は？

ファウラー（迷う。）これは難しい問題です。実際難しい。

しかし、ストラットン君の意見には賛成できません。さっきのは非常に新しい考えです。第三者から見て検証可能な行為の伴った罪、のみを悪とする。それ以外は悪と見做さない。これは新式の考え方です。しかしこの考えをキリスト教的倫理と呼ぶのは正しくありません。キリスト教は勿論それより深いものです。ある種の行為はそれ自身 検証出来ようと出来まいと 不純で不道徳であり、またそれ故に悪なので

す。私の意見では戦後の我が国における悪の横行、異常な性の氾濫は、この古い善悪の基準の崩壊によるものであると考えます。若い世代にとってみれば、この基準は感情的であり筋の通らないものに見えるでしょう。しかし私はこの基準を支持します。寛容さを示すのがいつもいいとは限りません。悪に対する寛容さはそれ自身悪と言えます。そう、慥かアリストテレスです。彼が言ったのは……

（ミーチャム、庭から登場。）

ミーチャム まあまあ、大袈裟な話。アリストテレスを引

用なさるんでしたら、その前にちょっと私、ここを通らせて戴きたいわ。

レイルトンベル 今の話はお聞きになって？ ミス・ミーチャム。

ミーチャム 聞こえてくるんですもの、仕方がないわ。私、こんな話聞きたくもなかった。いつもの精神統一をやっている注意力を一点に集めなきゃならなかったのに、ピッターこっち側の壁に椅子をくっつけて座っているもんだから、聞かなくても聞こえちゃう。他の場所に移ればいいって言うかもしれないけど、日当たりがいいのはそこしかないし、あなた方のために寒い思いをするのは厭でしたしね。

レイルトンベル 事実関係はもうご存じだとすると、ご意見を伺ってもよいと思えますけど、如何ですか。

ミーチャム 意見などありません。

レイルトンベル 何かはありになるでしょう。

ミーチャム ある訳ないでしょう。私はとつくの昔にこの世の中との関係を断っているんです。あなた方の誰よりも早くにね。それに私、道徳とか倫理にはまるで関心がないの。少し考えるのは小説を読む時位のものね。でも私の読むものといったら大抵は探偵小説。探偵小説じゃたいして道徳はいらないわ。ピーター・チェイニーの書いたものを読むけど、主人公はポロック少佐よりずっとひどいことを女の子にやっているわ。だけど誰も気にしている様子はないわね。

レイルトンベル ピーター・チェイニーの主人公は今の話とあまり関係がないように思いますけど、ミス・ミーチャム。あなたご自身のポロック少佐に対するご意見を伺いたいの

すわ。

ミーチャム あら、そう。あの人に対する意見ね。恐ろしく退屈な男、それにひどい食わせ者っていうことね。最初からそう思っていた。だから汚い男だっっていうこの話を聞いたって、驚きもしない。ちょっと悪い言葉を使わせていただくからね、こんなのどっちにころんだって私の知ったこつちやないわ。

(ミーチャム退場。問のあと、レイルトンベル、ファウラーに。)

レイルトンベル エーと、ファウラーさん、そうすると貴方は行動をおこすのに賛成、と言つことになりますわね。

ファウラー 私は昔、学生に退学処分をした事があります。校長をやっていた十五年間にただ一回。この時だけです。私はこの件では悩みました。ひどく悩みました。しかし処置は正しかったのです。あいつは駄目な男でした。はじめコンド口、次にゆすりや、そのあと酷い事をやってのけました。酷い事。(少しの間の後。)かわいそうな奴。あいつにはあいつの人生があつたのか・・・

レイルトンベル(いらいらして。)行動をとる事に賛成なんですか、どうなんですか。

ファウラー(仕方なく。)ええ、まあ・・・賛成という事になるでしょうな。

レイルトンベル(マシスンに。)あなたはどうなの、グラデイス。

(マシスンが躊躇っているの。)

レイルトンベル 他の人達みたいに議論を展開する必要は

ないのよ。ただ賛成か反対か、だけで。

(問。)

マシスン(やつと。)厭だわ。

レイルトンベル なにをぐずぐずしているの、グラデイス。こんなこと大嫌いっていつも言ってたじゃない。国中にこんな悪徳がはびこっている。なんて厭なことって。こんな人すぐ牢屋に入れてしまえばいいの、とも言ってたでしょう。

マシスン(やつと。)厭だわ。

レイルトンベル(本当にいらいらして。)どうしたの、グラデイス。早く決めて頂戴。ストラットンさんに味方して悪徳の擁護に一票を投じるか、ファウラーさん、ミシイス、ストラットン、私、に味方してキリスト教的美徳の擁護に一票を投じるか、どうなの。

チャールズ これは酷い。いくら自分の意見に傾かせようつたって、こんなに歪曲した表現って聞いたことがない。マッカーシー上院議員にこの技術を教えてやりたいぐらいだ。

レイルトンベル お黙り下さい！ さあ、グラデイス。どっちなの。

マシスン それはあなたの意見に賛成に決まってるわ。だけど・・・

レイルトンベル(チャールズに。)これで、ストラットンさん、五対一ですわね。一は貴方。ミス・ミーチャムは中立として。

チャールズ 五？ ジーン、ファウラーさん、レイディマシスン、あなた、で、四ですけど？

レイルトンベル 娘の一票がありますわ。これは私に賛成

なんですから。

チャールズ どうして分かりませう。

レイルトンベル こういう事に関して娘の感じ方は分かっていますから。

チャールズ 直接にその意見が述べられるのを聞きたいですな。

(シビル、この議論の間中、椅子に座ったまま身じろぎもしていない。両手は腿の上に置かれたまま。片手はハンカチで縛られている。じつと正面の壁を見つめている。)

チャールズ シビルさん、あなたの意見は？

レイルトンベル ストラットンさんがお前に聞いているんだよ。

シビル 何？ ママ。

チャールズ あなたのご意見は？

シビル 私の・・・意見？

レイルトンベル (はつきりと子供に言うように。)

ポロック 少佐に関するお前の意見。私達がどういふ行動をとるべきか。

(シビル、質問の意味分からず。返事をしない。)

レイルトンベル (他の人達に傍白の心持ち。)

シヨックをうけたんだわ。(シビルに再び。)

その新聞で読んだらう？

お前どう思うの？

シビル (囁き声。)

厭な話

レイルトンベル 勿論そうよ。私達もみんなそう思ったのよ。

シビル (次第にトーンが上がって終には怒鳴る。)

厭な話

厭な話。厭な話。厭な・・・

レイルトンベル (すぐにシビルに近づき、抱擁して。)

分かっています。分かっているの。ね、落ち着いて。大丈夫だから、ね。

シビル (母親の腕に顔を埋めて。)

私、気分が悪いの。ママ、行って休んでもいいかしら。

レイルトンベル 勿論よ。そうなさい。じゃあ読書室に行きましょう。ソファがあるし、誰もあそこには来ないし。

(ホールの方へシビルを連れて行く。)

もういらいらしないのよ。こないやなことはみんな忘れるの。なかつたって思うのよ。こんなことみんな。ポロック少佐なんてどこにもいなかつたつて。そう思えばいいの。

(二人、ホールへ退場。)

マシスン あんな話をシビルにはしてはいけなかつたわ。

あれはあの人の間違いだわ。

チャールズ (怒って。)

そうです。あの子がもし精神の障害を起こしたら、当然そりゃ、あの母親の責任ですよ。

マシスン (自分の発言内容を越えて解釈されるのは困る、という姿勢。)

ストラットンさん、それは私の話とは違いますからね。今のお話を私が言ったと思われるのは困ります。私はただ、「間違いだ」と言っただけで・・・

チャールズ 失礼しました。そうです。これは私の意見です。私の責任における発言です。

ジン あの人のお見を聞くなんて、貴方がいけないのよ。

チャールズ そこにしーずかに座っていたんだぜ。外から見た様子だと、聞いているように見えた。抑圧されたヒステ

リー状態にあるなんて想像もつかなかったんだ。そりゃ、今から考えれば、そこに思いあたっても不思議はないんだが、とにかく僕は今回だけあの一人一本立ちして貰いたかった。余計なお節介だけど、他人の目の前で母親に、自分の意見は違うと言って貰いたかった。あの人の一生のうちでこの一度だけはね。そうしていたら、あの人の魂は救われていたかもしれないんだ。

ファウラー ほほう。現代の精神分析も「魂」などという、古くさい感傷的な言葉を使うんですかね、ストラットンさん。チャールズ 魂。私は精神の意味で使ったんですが・・・いつか暇を見つけて、その違いを教えて下されば有り難いですね、ファウラーさん。

ファウラー そうしましょう。
チャールズ（立ち上がりながら。）それはまたいつか。今日は解剖学にかかずらわっていて・・・ごっちゃんになると困りますから。（ジーンに。）じゃ行くか。

（ジーン、立ち上がる。何となく言い足りない気持ち。）
ジーン チャールズ、今夜の貴方どうかしているわ。俺だけが正しいんだっていう、なまよきな態度だったじゃない。チャールズ ちょっと謝らなきゃいかなかな。どうやら調子にのり過ぎたようだ。常識的な人間の常識的な判断だと思ったら、それが少数派になっていたもんだから。こういうのを「孤高を保つ」というんですかね、ファウラーさん。

（チャールズ退場。ジーン、扉から戻って来る。）
ジーン（ファウラーとマシスンに。）あの人勉強のしすぎなんですの。明日になったら全く違った考えになっています

わ。（二人に約束する気持ち。）きつとそうさせますわ。

（レイルトンベル登場。）
レイルトンベル あの子はもう収まりました。いつでもすぐ回復するんですの。今は読書室で休んでいますわ。
マシスン 良かったわ。

ジーン 夫のことで、今謝っていたところですので、ミシイス・レイルトンベル。

レイルトンベル それは有り難いわ。でも私がいつも言っているのは、人は誰でも自分の意見を持っていいってことですわ。その意見がどんなに奇妙で、危険で、厭らしいものであっても。（きつぱりと。）さあ、みんなで一緒にミス・クーパーに会いに行きましょうか、それとも代表で私が行って来ましょうか。

（自分が行きたいのは見え見えである。暫くして皆、遠慮がちに話し始める。）
マシスン それはあなたが代表で行った方がいいんじゃない。

ファウラー 代理を出すっていうのはどうかね。
ジーン 代わりに行って下さった方がいいわ。

レイルトンベル 分かりました。
（レイルトンベル、新聞を取り、扉へ進む。）
レイルトンベル 嬉しくてこんな役目を引き受けているのではありませんのよ。分かってくれたいわ。

（退場。）
ファウラー（マシスンに。）皆を代表して進言する・・・

もつとあからさまに嬉しそうな顔をしてもいいんじゃないの

かな。

マシスン（賛成しかねて。） 義務を果たすのが喜び・・・
そういう人達もいるものですわ。私は違いますけど。私は弱い人間。こういうことは全く駄目・・・

ジーン（扉の所で。） 私が代表で行ったっていいわ。あんな厭な奴！（出る時独り言。） 赤ちゃん、泣いていなければいいけど。

（退場。）

ファウラー 情容赦ないな、あの女（二）。

マシスン 今時の若い女の子ってみんなそうじゃないかしら。

ファウラー（含みのある言い方で。） 若い女の子だけじゃない・・・ですね。

マシスン（仕方なく。） そう・・・ですわね。（溜息。）
嫌だわ。こんな事って。私、ひどく惨めな気持ちになっちゃった。

ファウラー 私もです。惨めな気分ですなあ。（溜息をついて立ち上がる。） 正義の味方につく、まあ今の場合我々がそんなのですが・・・すると自分が人を非難出来るほど潔白でない事に気づいて厭な気分になるんです。テレビでも見に行きましよう。この鬱陶しい気分をさっぱりさせたいですよ。

マシスン（立ち上がりながら。） ええ、そうですね。ニュースはもつそろそろおしまいですけど、そのあとフィリップ・ハーベンの素敵な番組があるわ。ただあの番組でいくら楽しい生き方を聞いてもちっとも実行してないわ。

ファウラー（二人、退場する時。） そうですね。楽しむだ

け楽しんでいて、実際は苦しみが多い生き方を選んでいる。これは、今日いうところのマゾヒズムってやつですか。

（二人退場。暫く部屋は空。開いたフレンチウインドウから、ポロツク顔を覗かせる。部屋を用心深く探る。誰もいないのに満足して入って来る。レイルトンベルの新聞が重ねてあるテーブルに素早く近づく。捜している新聞は既に、元あった場所にはないことをすぐ知る。狂気のように、積み上げた新聞をひっかきまわす。次に部屋を捜す。どうしようもなく、茫然と暖炉の傍に立つ。この時扉が開き、シビル登場。ポロツクを見てはっと立ち尽くす。ポロツクも動かない。）

ポロツク（やっと、痛々しい陽気さを見せて。） やあ、ミス・アール・ビー、調子はどうですか。

シビル ママの新聞を捜していたのね。

ポロツク え？ 何を言ってるんだい？ 新聞だったら別のやつを持って行ったから・・・

シビル ごまかさなくてもいいの。ママは読んだの、あれ。

ポロツク えっ。

（長い間。少佐の肩落ちる。テーブルに手をついて身体を支える。）

ポロツク 君も読んだの？

シビル ええ。

ポロツク ああ。

シビル それに他の人も。

ポロツク ミス・クーバーも？

シビル ママが言いに行ったわ。

(ポロツク頷く。万事休す、という顔。)

ポロツク(やつと。)(そうすると、これで終か。

シビル ええ。

ポロツク やれやれ。

(ポロツク坐る。床を見つめる。シビル、ポロツクをじっと見る。)

シビル(熱を込めて。)(何故あんなことをなされたの。どうして。)

ポロツク 分からない。答えられればいいんだが。どうして人はしてはいけない事をやるんだらう。酒を飲み過ぎる奴がいる。一日に五十本も煙草を吸う奴がいる。何故なんだ。ただ止められないから。そうじゃないのかな。

シビル じゃ、これは初めてじゃないのね。

ポロツク(静かに。)(初めてじゃない。

シビル ひどいわ。

ポロツク 勿論ひどい。弁護しようとは思わない。君には分からないかもしれないけど・・・僕は大学の頃から女の人怖かった。死ぬほど怖かった。考えてみれば、人間なら誰でも怖かった。でも特に女の人。大学では・・・これは勿論ウエリントンじゃなくて普通の公立の大学だったが・・・大学ではひどかった。臆病でおどしている奴はつまはじきだ。連中は僕を容赦なく扱った。親父も僕の事を軽蔑した。親父はブラックウオッチで特務曹長まで行った。僕を軍隊に薦めたのも親父だ。しかし親父にとって僕は、期待外れの息子だった。僕が将校になる前に死んだ。将校になったのもただのまぐれ。戦争が始まって昇進が甘くなつたんだ。しかし

僕は天にも昇る心地だった。敬礼はされ、「サー」とは呼ばれ、急に偉くなつたような、一かどの人物になつたような気がした。ひよつとするとこうなつたら、僕だつて誰か女の子がなびいて来て僕と・・・(言い止める。)(しかしそんな事は一度も起こらなかつた。僕は生まれつき変な風に来ていて、それを变える事は無理だつた。何時でも暗い所でなきやならなかつたし、赤の他人でなきや駄目だつた。どうしてかつて言つと・・・)

シビル(両手で耳を抑えて。)(止めて、止めて。聞きたくない。胸が悪くなつて・・・)

ポロツク(静かに。)(ああそつだね。こんな話だから・・・あたり前だね。どうしてこんな事をつて訊かれたもんだから、つい・・・それに僕も誰かには話してみたかつたんだ。こんな事を話すなんて、生涯ただの一度だつてありはしなかつたんだからね。

(ポロツク、立ち上がり、シビルの袖に優しく触れる。)

ポロツク 驚かせてしまつて悪かつた。特にシビル、あなたをね。

(ポロツク、テーブルに進み、本を二冊取る。)

シビル 何故特に私なの。他の人じゃなくて。

ポロツク ああ、他の連中なんて僕にはどうでもいいんだ。連中はそれぞれ勝手な解釈をして暫くは噂話の種にする。それでおしまいなんだ。だけどシビル、君は違つ。僕のことでは悩むんじゃないかと思つてね。

シビル 初めてだわ、私のことシビルと呼んだの。

ポロツク そうだつたかな。今さらミス・アール・ビーな

んて言つたつてはじまらないからな。

シビル 私 他の人と違つて、どつしてかしら。

(この時までにはポロツク、部屋の間から別の本、それからパイプを取り上げている。この言葉で振り向きシビルの方を見る。)

ポロツク 君が、性……あ、この言葉はまずいんだな……「人生」と、言つておこう。(これならいやらしい響きがないからね。)…君が「人生」をひどく怖がつているからだよ。君と僕とはだから、ひどくよく似ているんだ。このホテルでも僕達はよく取り残されて、気がついてみると二人だけになつていた。それはそのためなんだ。

シビル どうして二人が似ているなんておつしやるの。私 はあんなことは……(言い淀む。言葉を続けられない。)

ポロツク 分かつている。君は僕がしたような事は決してしないし、その気になることさえない。運がいいんだ。いや、本当に運がいいんだらうか。どつちが運がいいかなんて、誰にもわかりっこない。いや、とにかく僕の言いたい事は、僕等は人間が怖かつた。二人とも。だから二人一緒にいて、やつとその怖さを忘れることができた。僕のことを言つと、このことでは君に感謝している。決して忘れないだらう。勿論君がどう思つているか、そんな事はいいんだ。

シビル 何をしていらつしやるの。

ポロツク 荷物を纏めていゝんです。僕の物入れをどこかで見ませんでしたか。

シビル ここですわ。

(シビル、テーブルに進み、物入れを取る。ポロツク受け取る。)

る。)

ポロツク(苦笑つて。)(ウエリントンの記念の色だ。

シビル どうしてあんな酷い嘘をおつきになるの。

ポロツク ここにいるこの自分つていうものが嫌いなんだらう。だから自分の代わりの人間をこしらえてしまつた。本当はそんなに害があることじゃない。誰だつて多かれ少なかれ、自分でない人物をこしらえている。僕のは他の人よりちよつとやり過ぎていただけなんだ。自分自身が本当に少佐だと思ひこんだ事もかなりあるな。(はつとして。)(誰かホテルにいる?)

シビル(耳をすまます。)(いいえ、いないわ。どこにいらつしやるおつもり?)

ポロツク 分からない。ロンドンに知り合いがいる。一日 9
二日は泊めてくれると思う。あまり気がすまないんだが……

シビル どうして?

ポロツク(少しの間。)(その一、まあ……そいつも僕と同類項なんだ。(つまり、人生を怖がる点でね。)

シビル 行つてはいけないわ。そこへ行つてはいけないわ。

ポロツク 他に行く場所がないんだ。

シビル 別のホテルにすればいいわ。

ポロツク ボーンマスとかこの近くじゃ駄目だ。するとロンドンしかない。ロンドンじゃ僕が払えるホテルなんかあるだらうか。僕は知らない。

シビル お金をお使い下さい。お貸ししますわ。

ポロツク そんな、それはいいわ。

シビル いいえ、どうぞ。私、債券があるわ。それをお使

いになればいいわ。必要なら株式も・・・

ポロツク（シビルの手を握って優しく。）有難う、シビル。好意は有り難いが・・・それは出来ない。

シビル でもそうでないかと、今のその人のところへ行くんでしよう？

ポロツク いや、別の所を捜す。

シビル 別の所？

ポロツク 心配しないで。何とかやるよ。

（クーパー登場。後ろ手に扉を閉める。）

クーパー（明るく。）ここでしたの、ポロツク少佐。ちょっと事務所までいらして戴けません？

ポロツク わざわざ事務所まで行かなくても、ここで大丈夫です、ミス・クーパー。お話は分かっています。私はすぐここを出ますから。

クーパー そうですね。すると御自分から出るとおっしゃるのですね。

ポロツク 勿論。

クーパー 何故お訊きたかと言いますと、私の方からは全く出て戴く必要はないことをはっきりさせておきたかったからです。もし留まりたいとお思いなら、一向にさしつかえありませんのよ。あなたの方でお決めになる事ですわ、これは。

（間。）

ポロツク そうですね。これはご親切に。しかし勿論私は出て行かねば。

クーパー そのお気持ちは分かりますわ。では予告期間の

一週間分は戴かないことに致します。何時お発ちになりますか。夕食前？

ポロツク ええ、勿論。

クーパー どこかに落ち着かれるまで一時的にいらっしやるホテルのご案内を致しましょうか。

ポロツク そんなにご好意に甘えることは出来ません、ミス・クーパー。

クーパー ご遠慮なさることは何もありません。ボーリガードグループ経営のホテルがロンドンに二つあります。一つは西ケンシントン、もう一つはセントジョンウッドです。値段はほぼ同じです。どっちになさいですか。

ポロツク（間のあと。）西ケンシントンの方を。

クーパー 慥か、ここに名刺があった筈・・・ああ、ありました。

（暖炉の方に行き、小さなホルダーから名刺を取り出す。ポロツクに渡す。）

クーパー 代わりに私から電話しましょうか。

ポロツク 有難う。でも私がかけます。その方がいい。あとで面倒な事になるといけない。このことであなたに、必要以上にご迷惑をかけたくありませんから。事務所の電話を使ってもいいですか。

クーパー ええ、どうぞ。

ポロツク 電話代は払います、勿論。

（ポロツク、扉に進み、ホールに誰かいないか覗く。）

ポロツク シビル、あなたにはもうこれでお会いする機会はないかも知れない。その時には手紙でお別れを書きます。

(ポロツク退場。クーパー、シビルの方を向く。)

クーパー お母様は上で夕食のための着替えをなさっていますよ、ミス・レイルトンベル。お母様に言われて私、たった今あなたを読書室に捜しに行ったところでした。ご伝言ですわ。もしよろしければ、二階で夕食をお取り下さいと。

シビル いいの、下でとりませう。

クーパー (同情をもって。) 如何ですか、ご気分は？

シビル (ぶつきら棒に。) ええ、有難う。

(クーパー、シビルに近づく。)

クーパー 何か私に出来ることないかしら。

シビル (怒って。) いいえ、ありません。それから、そんな事はおっしゃらないで。また気分が悪くなります。それに私、変な事をやってしまいそう。今もそんな気分。あの人行ってしまふ。いい気味。私、あの人を軽蔑する。

クーパー 何故？ 私には分からないわ。

シビル あの人、悪い人。いけない人だわ。あんなひどい事をして。それにこれが初めてじゃないのよ。自分でも認めたいわ。

クーパー 私は違つと思ひます。

シビル それなのに、「もしよろしければ、このホテルにいてもいい。」なんて、これもいけない事だわ。

クーパー じゃあどうやら、私もいけない人間なのね。

(クーパー、シビルの腕に手を置く。) ねえ、シビル。

シビル どうして今夜は私のことをみんなシビル、シビルって呼ぶの。厭だわ。私を泣かせるだけじゃない。

クーパー そんな気持ちで言ったんじゃないの。ただ力に

なつてあげたくて。

(シビル、急にくずおれる。しかし今度はヒステリーはなく、静かに。クーパー、シビルを支える。)

クーパー それでいいの。それで楽になるわ。

シビル 酷い話だわ。

クーパー ええ、そうね。あなたには特に……

シビル あの人、私達は似たもの同志だつて言つたわ。あの人と私のことを。

クーパー そう？

シビル 私達は怖がつているんですつて。人生を。人間を。それに性的なものを……ああ、私、この言葉を言つたわ。

あの人、私がこの言葉を言つたつて怖がつているつて言つた。それは本当。私、「性的なこと」つて口にするのも怖い……あら、どうしたんでしょう。私、どうかしちやつたわ。

クーパー どうもしていいのよ。普通のこと。坐りましようか。(クーパー、優しくシビルをソファに坐らせ、自分も隣に坐る。)

シビル 私つて、変わり種なんだわ。

クーパー (事務的な調子で。) 「変わり種」？ どういう意味なのかしら、それ。他の人とは違つていうだけの意味なら、あなたがそうだつて言つてもいいでしょう。でも人間てみんな少しづつ違つているわ。もしそうでなかつたら、人生つて随分退屈じゃない。

シビル 普通の人になりたいわ、私。

クーパー 普通の人つて私には分からない。私、そういう

人を見たことがないの。私にとってはどんな人も一人一人みんな変わっている。この仕事ではね、あらゆる種類の人に会うのよ。ここで五年間やって学んだこと、それは「普通の」って言う言葉は人間には決してあてはまらないっていうこと。それに、もし「普通の」なんて言葉が人間に使えるようだったら、私達をお作りになった神様に失礼じゃないかしら。あの決まった型の人間しか、お作りになれなかったっていうことになるもの。

シビル ママはとても賛成しないような意見だわ。

クーパー そうね。お母様は賛成なさらないでしょう。お父様はいつおなくなりになったの？

シビル 私が七歳の時。

クーパー 学校にはいらしたの？

シビル いいえ。私は繊細過ぎるんですって。だからママが暫くの間家庭教師を雇ってくれて・・・でもほとんどはママだわ、私を教育してくれたのは。

クーパー そう。お母様から離れたことって、だから、一度もないっていうことだわね。

シビル 仕事をしたことがあるの。ちょっとだけ。(誇りをもって) ロンドンの大きな店で物を売った事があるの・・・ジョーンズ アンド ジョーンズ社で。電気スタンドを売ったわ。でも病気になるって止めなきゃならなくなったの。

クーパー (明るく。) 残念だったわ、それは。でもまたいつか働くんでしょう？

シビル ママはいけないって。

クーパー ママがいけないって？ そう？ でもやってみ

るんでしよう？ そのためにはまずママに、いいって言わせなくっちゃね。

シビル どうやってやったらいいか分からないわ。

クーパー やり方？ 簡単よ。出て行くの。そして自分で仕事を見つけるの。それならママだって、いいって言っしかないでしょう？

(クーパー、力づけるようにシビルの膝を軽くたたいて立ち上がる。)

クーパー さあ、仕事をやって来なくちゃ。(扉に向かう。)

シビル (急いで。) あの人、大丈夫かしら。

クーパー 少佐のこと？ さあ。でも大丈夫でしょう。

シビル あの人、あんなことをしたけど、罰が当たればいいなんて思えないわ。悪いことがないようになって思うの。西ケンシントンのそのホテル、いいホテルかしら。

クーパー いい所よ。

シビル そこでいいお友達に会えるかしら。あの人さつき、私に感謝しているって言ったわ。人間を怖がっている自分を、私のお陰で忘れることが出来たって。

クーパー あなたもあの人には感謝しているんでしょ？

シビル ええ。

クーパー (間のあと。) 次のホテルでいい友達が見つかるといいわね。

シビル ええ。ああ、本当に見つかるといいけど。

(ポロツク登場。)

ポロツク (早口で、クーパーに。) 大丈夫でした。ちゃんと予約を取りました。ご安心下さい。自分のことを単にポロツ

クと言いました。ポロツク少佐ではなくってね。あなたの名前も、このホテルの名前も言わないですみました。早速上に行って荷造りをします。

(シビルの方を向き、手を差し出す。)

ポロツク さようなら、シビル。

(シビル、暫く躊躇った後、ポロツクの手を握る。)

シビル さようなら。

(シビル、ポロツクの手を離し、扉へ駆けだす。)

シビル(振り返らずに。)(どうぞ、お元気で。)

(シビル退場。)

ポロツク ひどい動揺？(クーパー頷く。)(これを私は一番恐れていたんだ。あの子が変わっている。ほとんど事例研究の材料になるぐらい。心はまだ子供で、時々は全く意味のないことを口走る。でも私にとってあの子の存在は大きかった。

クーパー あの人のとってもあなたの存在は大きかったんじゃないかしら。

ポロツク そうでしょう、多分。でも、大きかったんです。勿論今は違う。あの子が好きだったのはイキな退役将校で、この今の私は・・・(言い止める。)(私の正体はもう全部話したんです。この方がいいんだと思っています。いつか分かってくれる時もあるでしょう。いや、一生分からないかな。

クーパー 一生無理じゃないかしら。

ポロツク 人はよく自分に言ってる聞かせるもんです。

「まあいいや、こつやつたってそんなに害はないだろう。」ってね。ただど害があるんですね、時々は。こつ考えると実際

いやになってきます。ちょっとホールを見て来て下さいませんか。みんなに会いたくないんです。

(クーパー、扉を半分開ける。)

クーパー ミス・ミーチャムが電話中。

ポロツク 畜生。

クーパー 何時の汽車ですか。

ポロツク 七時四十五分に・・・

クーパー まだ時間はありますわ。

ポロツク 物が多いんです。ひどく多い。四年間ですからね。引越。気が重いです。新しい場所での最初の数日のことを考えると恐ろしいんです。「恐ろしい」では言葉が足りません。新しい人達と会うことを考えると、怖くて身体が震えてくるんです。文字通り震えるんです。また例の「少佐」の作り話に逃げ道を見つけようとするんじゃないかと、それが心配です。

クーパー それはしない方がいいわ。

ポロツク 勿論したくはない。しないように努力はする。

ただどうまくいくか・・・

(扉の方へ用心深く進み、戻って来る。)

ポロツク まだいる。畜生。(帰って来て。)(こんなに親切にして戴いて感謝しています。何故こんなにして戴いたのか、私には分からない。それに値しない男なのに・・・しかし感謝しています。有難う。

クーパー いいんです。そんなこと。

ポロツク 私がこんなことを言うのはおかしいが、あなたは変わっている。そのテキパキとした支配人然とした顔の下

にどんな想念が渦巻いているか、誰にも想像はつかない、とても。何か過去にあったんですね。

クーパー ええ。

ポロツク ひどく悪いこと？

クーパー ええ。でももう、乗り越えました。

ポロツク 訊いてよければ・・・

クーパー 愛した人がいて、その人は他の人を。

ポロツク まだ愛している？

クーパー ええ。一生続くでしょうね。

ポロツク 望みはなし？

クーパー (明るく。) ええ。全くなし。

ポロツク それでそんなに明るくしていられる？

クーパー 他にどんな顔をしていたってしようがないですわ。この境涯が自分の運命だと思ふことにしたんです。希望を全く捨ててしまうと、陽気になれますわ。本当に不思議なくらい。それに何もかもみんな無くなっている訳ではありません。思い出が残っていますわ。楽しい思い出。

ポロツク (頷く。) 成程。なかなかの哲学ですな。(自分に言い聞かせるように。) 「なかなかの」「ですな」「これはこれからは止めた方がいいな。ミス・ミーチャムがいてもいなくても、もう荷造りを始めなくちゃ。汽車に乗り遅れてしまう。」

(扉に向かう。)

クーパー 留まったら如何ですか。

ポロツク (振り向く。信じられないという顔。) 留まる。

このホテルに？

クーパー 新しいホテルが恐ろしいっていうお話でしたもの。

ポロツク 今じゃこのホテルの方がもっと恐ろしいです。

クーパー そうね。そうでしょうね。でもここなら、また「少佐」を始める必要はありませんわ。

(間。)

ポロツク 「少佐」を始める必要はないが・・・もっと他のことを始める必要が出てきそうだ。もっと決定的なこと・・・昔使っていたピストルを取り出してズドンと・・・よくある話・・・絨毯をひどく汚してホテルに悪評をたてさせる・・・

クーパー (軽く。) 賭ね。私は留まることを薦める方に賭けますわ。お話の通りになれば私もくびですけど。

ポロツク ミス・クーパー。ご好意身にします。でも駄目です。意気地なしです、私は。卑怯者です、私は。

クーパー そう？ 残念ですわ。御自分がそうでないことを証明するいい機会じゃないかと思つて・・・

(間。)

ポロツク (やつと。) シビルのことも考えて言ってくれているんですね。

クーパー ええ。

ポロツク 颯爽とした退役将校。それをあの子の目に復活させようと・・・

クーパー そう。

ポロツク 私が自分を取り戻し、立ち直ることが出来たのはあの子の力によるものだ(あの子に) 思わせる？

クーパー ええ。

(再び間。)

ポロツク(ホツと溜息をついて。)駄目だ。望みはない。どこを捜してもつつついても、希望のかけらも出て来ない。それだけ私は意気地なしなんです。

クーパー 本当は違うんじゃないかしら。

ポロツク(悲しそうに。)いや、違わない。僕にはよく分かっている。でもとにかく留まることを薦めて下さって感謝します。

(ポロツク、注意深くホールを覗く。)

ポロツク 障害物なし。

(ポロツク、振り向き、長い間クーパーを見る。クーパーもじっと見て目を離さない。)

ポロツク(やっと。)九時何分かの汽車もありましたね。

クーパー 九時三十二分です。

(迷っているかのように、ポロツクまた暫くクーパーを見る。それから恥ずかしそうな表情になり。)

ポロツク やはり七時四十五分にします。

(ポロツク退場。)

(暗転)

第二場

(場 食堂。第一幕の最初の時のように丁度夕食の最中。但し窓際のテーブルは若い「飛び込み」のカップルで占められている。二人は自分達だけに関心あり。他に気をとられない。一つのテーブルだけが空席で、テーブルの上に何もなし。他はいつもの通り。)

(明かりがつくと全員が喋っている最中。もっと正確に言うのと「飛び込み」の若い二人は囁き声で話している。ストラットン夫妻は議論の最中。マシスンとファウラーはテーブル越しに話。レイルトンベルはシビルに話を聞かせている。メイベルが、「今日のレース」に没頭しているミーチャムに近づく。)

メイベル(背景の会話よりはつきり聞こえるように。)フリカツセでしたかしら、それともケンブリッジ・ステーキでしたか?

ミーチャム え? ああ、どっちでもいいわ。まずいことには変わりないんだから。

メイベル それではコールドチキンになさったら?

ミーチャム ホットなチキンが出ないうちに、もうコールドが出せるって言うの?

メイベル 私だったらフリカツセにしますけど。いいお味ですよ。兎なんです。

ミーチャム じゃあ、フリカツセ。

ファウラー チーズはないかな、メイベル。

メイベル ええ。残念ですけど。

ファウラー チーズがあつたためしがないな。

(メイベル、ミーチャムにフリカツセを出し、台所にドスンと退場。)

(レイルトンベル、マシスンの方に身体を近付けて。)

レイルトンベル 今夜テレビで新しい番組が始まるんじゃないか? つかし。

マシスン ええそう。番組紹介で詳しく読んだわ。いい番

組のようね。私、来週は必ず見るわ。

レイルトンベル あら、今日は見ないの？ 何故？

マシスン とても疲れたの。夕食がすんだらすぐ休むわ。

レイルトンベル そうね。(声を低めて。) 本当に神経が疲れる一日だったわね。今日のごことは決して忘れないわ、きつと。私もすっかり滅入ってしまった。(シビルに。) ソースを取ってね、シビル。

(マシスン頷く。レイルトンベル、ワインをすすする。)

(この時までにはポロツク、静かに食堂に入ってきて来ている。レイルトンベル、振り返り、信じられないといった目つきで、ポロツクを見つめる。ポロツク、自分のテーブルに近づき、坐る。食堂の会話、死んだように沈まる。)

(電気のようなものを感じて、若い二人の「飛び込み」の客も、理由は分からないが、黙ってしまう。沈黙はドリーンが入ってきて、ポロツクを見ることで破られる。)

ドリーン(台所の扉をあけると、その場で台所の方に向かって言う。) メイベル、七番テーブルありよ。あなた、夕食からあそこは「なし」って言うってだけ。

メイベル(舞台裏で。) ジョーがそう言ったのよ。夕食前にチエックアウトだからって言ったわ。

ドリーン ご免ね、少佐。手違いがあつたみたい。すぐ用意するからね。

(ドリーン、台所に帰る。相変らず沈黙が支配している。ドリーン、盆をもって帰ってきて来て、素早く少佐のテーブルの用意をする。)

ドリーン 何にする？ フリカッセがおいしいよ。

ポロツク じゃあ、それにする。有難う。

ドリーン まず、スープ？

ポロツク いや、いい。

ドリーン(食器を並べ終わって。) さてと、これでよしと。フリカッセにしたのよね。

ポロツク そう。

(ドリーン、台所に入る。シビル、ポロツクを見つめる。ポロツク、目をあわせない。目を伏せて自分のテーブルを見つめている。ポロツクが存在が気づまりで、他のものも目を伏せている。例外はシビルとレイルトンベル。レイルトンベルは少佐と他の客とを代わる代わる睨み付ける。この沈黙は突然チャールズの神経質な甲高い挨拶で破られる。)

チャールズ(少佐に。) やあ、今晚は。

ポロツク(呟く。) やあ。

チャールズ 雲り空ですね。ひよつとするとこれは雨ですよ。残念ながら。

(ジーン、怒って夫を睨み付ける。この時までにはレイルトンベル、チャールズを黙らせようと、椅子を回してポロツクを睨む。)

ポロツク そう、雨のようですね。

ミーチャム 一雨(ひとあめ)来た方がいいのよ。こう乾いては馬場がすっかり荒れてしまう。(ポロツクに。) ニューマーケットをご存じでしたわね。

ポロツク いや、知りません。

ミーチャム でも以前貴方言ってたでしょう・・・(意味が分かり。) ああ、そうね。とにかく馬場が乾きすぎるとレ-

スの予想がし難いの。でももし明日雨が降ったら火曜日
の勝ち馬は教えてあげられるわ。

ポロツク 有難う。ご親切に。ただその・・・私は火曜日
にここに居るかどうか・・・

ミーチャム あらそう。分かった。それなら住所を教
えて頂戴。電報で連絡してあげる。勿論電報代は戴きま
すよ。

ポロツク 有難う。感謝します。

ミーチャム 負けたら感謝はないでしょうけど。

(ミーチャム、再び「今日のレース」に戻る。)

(クーパー登場。)

クーパー (明るく。) 今晩は、ミスイズ・レイルトンベル

今晩は、レイディ マシスン。今晩は、ポロツクさん。

(「さん」は「少佐」とも聞こえるように発音する。クーパー
の少佐に対する態度は他の二人に対すると全く同
様。儀礼的なもので、特別な感情を込めていない。)

クーパー テーブルの用意を忘れていましたそれで、失礼
致しました。

ポロツク いや、構わんです。

クーパー フリカッセが今日はいいですわ。今日のは本当
によく出来ていて。

ポロツク ええ、さつきそれにしました。

クーパー そうですか。それはよかったです。(次に進む。)

今晩は、ストラットンさん。奥さん。何か御用はありませ
んか。(ストラットン夫妻、何も無いという意志表示。)

それなら・・・

(クーパー、飛び込みの若い客には他の人より軽い挨拶をし、
退場する。)

(レイルトンベル、すきま風がある、というふり。そして。)

レイルトンベル(マシスンに。) 急にこの部屋、寒くなっ
たんじゃない? グラデイス。

(マシスン、居心地悪そうに頷く。)

レイルトンベル 私、椅子を少し回してすきま風を避けな
くつちや。

(椅子を回す。明らかに少佐への嫌がらせで、ポロツクに背
を向ける。ファウラー、静かにテーブルから立ち、扉へ進む。

このためにはポロツクの傍を通らねばならない。一、二歩通
り過ぎた後、ポロツクに向き直り、頷き、微笑む。)

ファウラー 今晩は。

ポロツク 今晩は。

(この恥ずべき裏切り行為が誰によってなされたかを確かめ
るために、レイルトンベル、鋭く頭を後ろにまわす。)

ファウラー 今日にはハンブシャー、なかなかうまくやりま
したね。五人投げる間に三百八十点とはね。(訳註 クリ
ケットの試合の話。)

ポロツク もっと打撃が続くとよかったですかね・・・
まあ、とにかく・・・

(ファウラー、微かに微笑み、広間に退場。レイルトンベル
「ふん、呆れた。」と聞こえるように、怒って呷く。急に、

偶然に、ポロツクとマシスン、目が合う。自動的にマシスン、
頭をさげ、微かな微笑みを返す。ポロツク、挨拶を返す。)

マシスン(ポロツクに。) 今晩は。

レイルトンベル（嘔き声で。）グラディス！

（マシスン、さっきの会釈はただ自動的に頭が下がったのだが、この時初めてそれに気づく。しかしもう、毒を食らわば皿まで、という気持ちになって。）

マシスン（急に勇敢になり、大きな声で。）アップルシャルロッテが美味しいわよ。それになさったら。

ポロック 有難う、それにします。

（マシスン、自分のしたことの重大さに気づき、心臓が止りそうな気分になる。デザートとアップルシャルロッテに屈み込み、必死に詰め込む。向こうから、信じられないといった目つきで睨み付けているレイルトンベルの視線を避け続ける。レイルトンベル、マシスンの反応が得られず、ついに諦めてナプキンを畳み立ち上がる。）

レイルトンベル（静かに。）さ、シビル、行きましよう。

シビル（同様に静かに。）まだ終わってないの、ママ。

レイルトンベル（この普通と違う返事に驚いて。）そんなこと関係ないでしょう。広間に行きましょう。

（シビル、立ち上がる様子なし。母親を見上げた儘 問あり。）

シビル いいえ、ママ

（問。）

レイルトンベル（鋭く。）シビル、いらっしやい。来るんです。

シビル（言葉に静かな強さあり。）いいえ、ママ。私、ここにまだいます。夕食をここですませます。

（レイルトンベル、躊躇。明らかに、自分がいかなる行動をとるのがよいか考えている様子。ついに残された唯一の行動

を取る。即ち名譽ある退場である。母親が扉に到達する前に、シビル、ポロックに話しかける。）

シビル 今日はお月様が綺麗な筈だわ。あとでみんなで見に行きましょう。

ポロック ええ、そうですね。

（レイルトンベル、自分の世界が崩れ去って、広間に退場する。そのちよつと前にドリーン、ポロックの料理を持ってどたどたと入ってきている。ドリーン、ポロックに料理を出す。）

ドリーン 遅くなっちゃって。だけどそちらも遅刻だったんだからね。

ポロック そう、こちらの責任だ。

ドリーン あら、今日はどうしたの。「いや、吾輩の失策だ。『っていうんじゃないの？

（ドリーン、自分の胸を叩いて見せる。明らかにいつものポ8
ロックの動作の真似である。）

ポロック そうだな。まあ、同じ意味だ。

ドリーン それもそうね。（料理を出し終り。）さてと、召し上げれ。朝食はどうするの？

ポロック 朝食？

ドリーン ジョーはチェックアウトだって言ってたけど、あれ、間違いなんじゃない？

（問あり。シビル、じつとポロックを見つめる。ポロック目を上げ、その視線を受けとめる。）

ポロック（やっと、静かに。）そう。間違い。

ドリーン そうね。じゃ、朝食はいつも通りね。

（ドリーン、台所に退場。ポロック、フリカッセを食べ始め

る。シブル、デザートを食べる。飛び込みの若い二人の聲が時々聞こえる他は、沈黙が再び支配する。ボーリガードホテルの食堂でたった今終わった戦闘はこの四つの壁の中に、まじまじと跡を留めない。）

(幕)

平成三年（一九九一年）二月十一日 訳了

http://www.aozora.gr.jp/~遊業/0項_文政/

<http://www.01.246.ne.jp/~tnoumi/noumi1/default.html>

Separate Tables was first produced at the St. James's Theatre, London, on September 22nd, 1954, with the following cast:

Table by the Window
Mabel Marion Fawcett
Lady Matheson Jane Eccles
Mrs. Railton-Bell Phyllis Neilson-Terry
Miss Meecham May Hallatt
Doreen Priscilla Morgan
Mr. Fowler Aubrey Mather
Mrs. Shankland Margaret Leighton
Miss Cooper Beryl Measor
Mr. Malcolm Eric Portman
Charles Stratton Basil Henson

Jean Tanner Patricia Raine

Table Number Seven

Jean Stratton Patricia Raine

Charles Stratton Basil Henson

Major Pollcock Eric Portman

Mr. Fowler Aubrey Mather

Miss Cooper Beryl Measor

Mrs. Railton-Bell Phyllis Neilson-Terry

Miss Railton-Bell Margaret Leighton

Lady Matheson Jane Eccles

Miss Meecham May Hallatt

Mabel Marion Fawcett

Doreen Priscilla Morgan

The plays directed by Peter Glenville

Docor by Michael Weight

Rattigan Plays The Trustees of the Terence Rattigan Trust

Agent: Alan Brodie Representation Ltd 211 Piccadilly London W1V 9LD

Agent-Japan: Martyn Naylor, Naylor Hara International KK 6-7-301

Nanpei-daicho Shibuya-ku Tokyo 150 tel: (03) 3463-2560

These are literal translations and are not for performance. Any

application for performances of any Rattigan play in the Japanese language should be made to Naylor Hara International KK at the above address.
